

ことのねは月のかげにもかよへばや空にしらべのすみのぼるらん  
たけくまの松の風にやかよふらむあつまのことのねこそ聞ゆれ  
あつまごと春のしらべをかりしかばかへし物とはおもはざりけり  
古のよ竹のことにすげしをばいかなるふしにしらべなしけむ  
かきならす水のしらべも岩こえて夕風かよふ軒の妻ごと  
大八島國の名おへることにこそ神代のまゝのねはのこりけれ  
あふ阪やあづまてふ名のつま琴は清水にこそゑのかよふ也けり

○琵琶

ひは

○よつの緒 ○なむの月 ○つまびき ○村さめ

九重の春のしらべも定りぬ四の緒すげてちりやはらはん  
時しあればくもぬはるかにめぐりきて半の月の光そへけり  
月ことのしらべも引ぞしらるらん四の時しる四のをのこと

○管絃

いとたけ

○いさたけのあそび ○いさ竹のしらべ ○いさ竹の琴 ○琴のれも竹も ○よふたきこゑ  
○みあそびの音

後 千  
このねも竹も千年のこゑするは人のおもひにかよふ也けり  
ふえ竹の夜ふかき聲ぞきこゆる峯の松風吹や添らん  
君安くおはしますとはいと竹のみあそひの音に民やしるらん

貞 實 之  
齋 信 之  
自然法親王

大 美 重  
平 清 老

眞 千 吉 廣 伊 範 越  
淵 隆 順 足 勢 綱 後

○笛 ふえ

○ふえ竹 ○から竹 ○青竹 ○こまふえ ○ふえのね  
○ふく ○ならす ○しらべ ○しらぶる ○ふえのしらべ  
○横笛 ○胡竹のふえ ○草かりふえ ○うないがふく笛 ○ふえ竹のひさ夜  
○ふきたつる ○春の鶯のさへずり ○ふえ竹の一ふし ○野がひの牛にふく笛 ○さなりのふえ  
○のどけき塵もあらし ○秋風に吹合す ○うき一ふしにふく ○こゑすみのほる ○落る梅  
○梅ちるがせ ○月にふきよる ○月にすむ

後拾 千 勳  
ふえの音の春おもしろくきこゆるは花ちりなりとふけばなりけり  
ふえのねの萬代までときこえしを山もこたふるこゝちせしかな  
いへばえにふかくかなしき笛竹の夜聲は誰とゝふ人もがな  
すまの浦の松ふく風や古の青葉のふえのねにかよひけむ  
さえわたる笛のねきけばくれ竹のもとの霜夜もしのばれにけり  
遠くすみ近くきこゆるふえ竹は空にあらしのふけばなりけり  
うら安の國ぶりしるく萬代にくだてふ笛はねをたえにけり

よみ人 右大臣  
よみ人 草澄  
菅彦 春庭  
眞淵

○鼓 ついみ

○つみみの音 ○時のつみみ ○時守が打なす ○大つみみ ○かくるつみみ ○つみみこけむす  
○鼓のつみみ

代  
打ならず人しなれば君が代はかけしつみも苔むしにけり  
左手の弓とるかたの袖たれてうつやつみみの音のさやけさ

光 紀 伊  
秋 伊

三のまひの五のふしもつゝみてふものゝ音なくばうちもわかれじ

眞 淵

○鐘 かね

- かれのこゑ ○かれのおと ○時つくかれ ○れよこのかれ ○霜夜のかれ ○高野のかれ
- 入相のこゑ ○さゆる ○おざろく ○霜のかれ ○尾上のかれ ○更ゆくかれ
- 夕ぐれのかれ ○入相のかれ ○つきはつる ○はつせのかれ ○豊浦のかれ ○横川のかれ
- ひえのかれ ○曉のかれ ○明ゆくかれ ○曉さこのかれ ○野寺のかれ ○つぐる
- ひやく ○つく ○つくくこ ○きこゆる ○古寺のかれ ○枕にひやく
- 夢おざろかす ○うつ ○なる

拾

山寺の入相のかねのこゑごとにつふもくれぬときくぞかなしき

後拾

さなくともねられぬものをいとしくつき驚すかねの音かな

千

打ならすかねの音にや長き夜も明ぬなりとはおもひしるらむ

新

あかつきとつげのまくらをそばだてよきくもかなしき鐘の音かな

勅

はつせ山あらしの道の遠ければいたりいたらぬかねの音かな

やどるべきふもとのかたにきこゆれどかなしきものか入相のかね

はつせ山あかつきのかねのこゑきよてひばらの霜の深さをぞしる

遠近に夕のかねの音すなり山に入日も道いそぐらむ

よみ人 和泉式部 俊成 道助 知紀 千隆 桐呂 眞淵

○車

くるま

- 下すだれ ○ゆく ○ゆきめぐる ○よする ○輪 ○小車 ○手ぐるま
- 糸毛の車 ○かざり車 ○物見車 ○牛のくるま ○すき草 ○から車 ○おと
- くさび ○あつろ車 ○力車 ○人たまひ ○上車 ○衆つみ車 ○ながえ
- 下すたれ ○ひく ○牛 ○めぐり車 ○乗車 ○忍車 ○炭の車 ○炭の車
- むな車 ○やぶれ車 ○わだち ○かたは ○しぢ ○もろわ ○めぐる
- 水車 ○淀車 ○車をたく道 ○くさびぬく ○さしる車 ○からびさし

万

戀草をちから車に七くるまつみてこふらくわがこゝろから

金

早きせにたゝぬばかりぞ水車われもうき世にめぐるとをしれ

老の坂今いくたりか引つるゝはとのくるまのわらはともだち

ぬしゝらぬもの見車の下すだれあやなくけふぞおもひかけたる

とし月のめぐる車のからびさしからくも老となりにけるかな

女行安春千 王尊守門 陸

○筏 いかだ

- いかだし ○柚のいかだ ○杉のいがた ○いかだの床 ○いかだ棹 ○いかだ繩
- おろすいかだ ○下すいかた ○いかだしの麻の衣 ○岩間を下す ○早瀬さしこす ○瀬のさばり
- 川瀬のいかた ○たゝむ ○組む ○くれ ○なつむ ○岩にふり

後

浅きせをこす筏しの繩よわみ猶このくれもあやふかりけり

代

いかだしにあふ柚川のみをつくし押のけられて過る頃かな

依

柚川やくたすいかだはおく山にいく代ふる木のつまでなるらん

早川をすぎのいかだのそれよりも下りやすきはこゝろなりけり

よみ人 同 依平 黄中

○舟 ふね

- 天の岩舟 ○はし舟 ○大御舟 ○松浦舟 ○もろこし舟 ○岩ふね
- かれ野の舟 ○天の川舟 ○四の舟 ○いつくふね ○さも ○早舟
- かぢ ○帆 ○おひがせ ○大舟 ○舟をさ ○舟路
- 棚ふし小舟 ○高瀬舟 ○いさり舟 ○舟人 ○舟なを ○世をうみわたる
- あしはや小舟 ○あし分小舟 ○みなご舟 ○もかり舟 ○芹かり舟 ○若めかり舟
- 舟ながしたる ○舟よそひ ○もやひ ○つなぐ ○こもかり舟 ○たけよふ
- あまの捨舟 ○あけのそぼ舟 ○すて小舟 ○こぎゆく ○たゆたふ ○たよふ
- さす ○友ふれ ○うき舟 ○うかべる舟 ○われ舟 ○千舟
- もよ舟 ○朝べらき ○みなご出 ○舟やかた ○一葉の舟 ○川
- 稻舟 ○柴舟 ○月の舟 ○うら ○川
- 江 ○ほり江こぐ ○つり舟 ○さまり舟 ○いさり舟 ○引舟
- から舟 ○月のみ舟 ○舟出すらしも ○いり舟 ○出舟 ○しほ舟
- つなける舟 ○つなぬ舟 ○ゆきよの舟 ○壺まつ舟 ○はつる ○ひく
- のぼる ○こぐ ○わたる ○出る ○よる ○うけて
- うかべる ○さまる ○さわたる ○なかつ ○ゆく ○こぎたむ
- めぐる ○さまる ○さわたる ○なかつ ○ゆく ○こぎたむ

古 同 万

まものごと雲にみゆる阿波の山かけてこぐ船とまりしらすも  
 風早のみほの浦わをこぐ船の舟人さわぐ浪たつらしも  
 しら浪のあとなき方にもく舟も風ぞたよりのしるべなりける

船王  
 よみ人  
 しらす  
 勝臣

後 拾

○帆 ほ

なにはづをけふこそみつの浦舟にこれや此世をうみわたる舟  
 はるくくと雲をさしてゆく舟のゆく末とほくおもほゆるかな  
 くちてたにすつべからぬをおもふにも是ぞうへなきうき寶なる  
 風早のみほの浦波たぬ日はあまのつり舟沖にうかべり  
 すみの江の神のながめにかゝるともしらでや舟の行かよふらん  
 沖つ風吹にけらしな武蔵の海大江のみとにいつて舟よる  
 有明にいせの海べを見わたせば舟もこゝろもすみわたりけり

粟平  
 伊勢  
 春庭  
 久秋  
 千廣  
 眞淵  
 有功

- 眞帆 ○かた帆 ○帆かけ ○帆に上る ○帆なは
- ひらく ○帆筒しめ繩 ○帆がけ ○帆に上る ○帆なは
- ほて

六

おひ風の吹ぬる時はこぐ舟のほに出てこそうれしかりけれ  
 住の江のまつふく風を帆にあげて沖ゆく船の安き御代かな  
 天雲のむかぶすかぎりゆく舟のほかげをなみの上にみるかな  
 おきつ浪千重にかくれてもら舟のほかげを空の限りにぞみる  
 かせさきになる戸過ゆくおきつ舟つくる帆なはいく手なるらん

貫之  
 久道  
 京呂  
 元雄  
 春海

○楫 かぢ

- おもかぢさりかぢ ○かぢさる間なく ○まかぢしめぬき ○からかぢ ○かぢり
- かぢさる ○かぢなたえ ○かぢまくら ○かぢふりたて ○かぢの音

○かぢの音のつばらく

○かぢさるひま

○やかぢかけ

○かぢふりたてよ

万

さ夜ふけてほり江こぐなる松浦舟かぢの音高しみを早みかも

よみ人  
しらず

同

かれのみや夜舟はこぐとおもへれば沖べのかたにかぢの音すなり

景  
千 隆

○櫂

棹 櫓 かい さを ろ

○かいのしづく ○からろ

○さもろ

○みさを

○水なれ棹

○棹さす

古

わがうへに露ぞおくなる天の川とわたる舟のかいのしづくか

よみ人  
しらず

勅

熊の川くだす早瀬のみなれ棹さすがみなれぬ浪のよひぢ

春  
太上天皇

○碇

いかり

○いかりおろす

○いかりの繩

○いかりの綱

○しづむ

○しづめる

万

大舟のたもたふ海にいかりおろしいかにしてかもわが戀やまむ

よみ人  
しらず

六

追風にかせはなほりて吹めともあまりいかりにといまりやせん

伊  
厚 勢

むしあけのせとの夕汐かなひなば早いかりとれ波たぬまに  
舟人のいのちをかくるいかり綱いかにこゆるのなみもさわがむ  
いかりてふ名こそおひたれあら浪に船をおだしくとむる也けり

日  
濱 直 善

○咎

とま

○ふくさま

○咎引おほふ

○明ゆく咎

○ごまもる雨

○ごまもる露

○ごまもる月

大舟をとむるいかりのつなで繩心づよくも見ゆる君かな

千  
隆

後

秋の田のかりほのいほのとまをあらみわが衣手は露にぬれつゝ  
きみが代の惠の露のもるとまもうへはやつれてみゆるなりけり

よみ人  
しらず  
基 政

○網

あみ

○あびきする

○すくあみ

○さすあみ

○さなみばる

○あみさして

○手引のあみ

○手ぐりのあみ

○あみ引

○あびき

○あみの手繩

○あみはりわたし

○くりつめるあみ

○かすみのあみ

○うき世のあみ

○あみのうけなは

○あみのうけ

○ほすあみ

○鳥のあみ

○おろす

○あみなは

○浦よりなちにおく網

○大あみ

○あごのひさつな

○鯛ひくあみ

○あご

○あごまのふる

○うすき

○めならぶ

○あみのうけ舟

○あみ引たみ

○あめのあみ

万

大宮の内まできこもあびきすとあごとよのふるあまの呼ぶる

意  
大 呂

六

あま人のへにくりつめるあらのめはつらき心のかすにざりける

よみ人  
しらず

代

おくあみのうけもひかれぬものも急になにかはあまの袖ぬらすらん

河  
内 海

○繩

にはをよみあ引すらしも夕風にあごとよのふる聲のきこゆる

廣  
海

○たくなは ○千ひろたくなは ○つりのうけなは ○墨なは ○うつすみなは ○たぐる

○あまのつりなは ○あまの手繩 ○筏なは ○つなでなは ○繩をむすびし古

○みしめなは ○やへのしめ繩 ○しりくめなは ○ひく ○くる

○あ麻のながし繩 ○ひたのかるなは ○蒲の穂なは ○千尋の繩 ○鶴なは

○よる ○ながき ○たゆる ○打はへ ○ひさすぢ ○ひさすぢ

○いくり繩 ○あみ繩 ○あみの手繩 ○網のうけ繩 ○網筒しめ繩

万 細 万 たく繩のながきいのちのほしけくは絶すて人を見まくほりこそ 麻續娘子

後 頼 春 海 ね 頼 春 海 ね 頼

○網 つな

○つなでなは ○胸にさすつな ○まさきのつなで ○つなぐ ○なるこのつな ○あまの古網

○竹のより網 ○ねりその網 ○千筋の網 ○千引の網 ○うき世のつな ○心のつな

○おもひのつな ○ひく ○ひくてあまた ○さく ○むすぶ ○よる

○日の御つな ○手網 ○舟のつな ○いかりのつな ○帆のつな ○あみのつな

万 崎のあまのつり舟のつな堪ずして情におもひて出てきにけり 同 しみん しば

同 前玉のつにをる舟の風をいたみつなはたもともことなたえそね 同 しみん しば

夫 うき橋に竹のより網打はへて小舟ならぶるふじの川なみ 慶 融

○魚梁 やな ともにへにはりてかけたる碇づなゆるぶをみれば鹽ぞおつなる 尊 朝

○やな打わたす ○のぼりやな ○やなうつ ○くだりやな ○くづれやな ○やなせの浪

○さす ○打わたす

万 万 あだ人のやな打わたす瀬を早み心はおもへどたいにあはぬかも 同 しみん しば

拾 やなみれば川風いたく吹時ぞ浪の花さへ落まさりける 廣 海

○漁 いさり あさり

○いさり火 ○いさりたく ○あまのいさり火 ○いさりする ○いさりの火かけ

○釣にさもせるいさり火 ○あさりする ○あまのさもし火

万 山のはに月かたぶけばいさりするあまのともし火沖になづさふ 同 しみん しば

六 大空にあらぬものから川上に星かともみるかあり火のかげ 同 しみん しば

暮わたるいはやがはなの浪間よりあらはれそむるあまのいさり火 景 道

○釣 つり

○つり舟 ○つりなは ○つりのうけ ○つりの糸 ○つりのを ○たひつる

○すゞさつる ○海さち ○川さち ○うけ

万 風をいたみ沖つ白浪高からじあまのつり舟濱にかへりぬ 角 廣 呂

同 同 むこの浦のにはよくあらしいさりするあまのつり舟浪の上もみゆ 同 しみん しば

同 同 さゝ並のひらの山風浪ふけば釣するあまの袖かへるみゆ

いせの海のつりのうけなるさまなれど深き思ひは底にしづめる  
をとめ子が常世にいざとさそふまで春の汐ちにつりたれてみん  
つりの糸のはそき手業につながれてすめはすまるゝ世にこそ有けれ  
大急つるさがみのさきの夕なぎにみだれて出るあま小舟かも  
なごの浦の鹽瀬にかゝるつり舟のほのかにみゆる秋の夕ぐれ

躬恒  
千隆  
千浦  
眞淵  
有功  
痾

○天皇

すめらぎ

○あまつ神のみこ

○天つ神の御子の命

○大君

○わが大君

○めみし、吾大君

○大君は神にしませば

○あまつみ神

○日のみ子

○天つ日繼

○あまの日繼

○天下しろしめす

○天地さきはみなき

○たかみくら

○天つ高みくら

○遠すめろぎ

○すめらわが

○うつ御手

○御門

○代々のみかど

○御世々々

○御世

○大御世

○中今の御世

○御代しろしめす

○みづのみあらか

○日の御門

○大御門

○くもりなき天つ日繼

○久かたの天つ日繼

○大君にまつるふものこ

○君

○君が代

○君が大御代

○なす國天の下

○神ながら

○天地にたらしめて

○かけまくもかしこき

○かけまくもあやにかしこき

○あやにかしこき

○皇神のつぎて給へる

天地をてらす月日のきはみなく有べき物を何かおもはむ

淡路天皇

大君は神にしませば天雲のいかづちの上にいほりするかも

人 廣 呂

山川もよりてつかふる神ながら瀧つかふちに舟出せすかも

同

久かたの天もく月を綱にさしわが大君はきぬがさりせり

同

天地にたらしめてわが大君のしきませばかもたぬしき小屋

家 持

天なるや月日の如くわがるもへる君が日にける考らくをしも

よみ人  
しらず

わがおほきみ物なおほしすめ神のつぎてたまへるわれなげなくに

御名部皇女

神代より今わが君につたはれる天の日つぎのほどぞ久しき

師 光

すべらぎの神のみことをうけきつるいやつぎくに世をおもふかな

法 皇

かぎりなく世をこそてらせ空にすむ月日や君がみかけ成らん

忠 光

萬代にあきつみ神と大八島國しろしめす君ぞかしこき

大 平

久かたの天つ日つぎのたかみくらうごく世しらぬ君が御代かな

譽 重

御光のおよぶかぎりぞ天てらす神の日繼のしる處なる

重 威

ものみなはかはりもけども明つ神わが大君の御代はかはらず

宣 長

山川もよりてつかふるわが君にたれかは千代をみつがざるらむ

有 功 痾

○東宮 親王

ひつぎのみ子 みこ

○はるのみや

○はるのみやま

○光いづる

○みこの命

○さしのほる日影

○大御子

○高光る日の御子

ひむかしの野にかぎりひの立みえてかへりみすれば月かたぶきぬ

人 廣 呂

みねたかき春日の山にいづる日はくもる時なくてはすべらなり

因 香

つくばねのこのもとことに立ぞよる春のみ山のかげをこひつゝ

清 樹

後拾月

光いつるあふひのかげをみてしかばとしへにけるもうれしかりけり  
くもの上の長閑き御代といのらば春の日かげのさすを見ましや  
天下てらす朝日の御光を縮見が室にみそめつるかな  
君が代をつひにもづるのひいきとやかねてうぶやにうちならすらん  
わかやかにたもとつらねて出入ものどげき春のみやのうちかな

○皇后

きささき

○きささきがれ

○おほきさき

○きさいのみや

○秋のみや

○秋のみや人

古

後拾

久かたの中におひたる星なれば光をのみぞたのむべらなる  
紫のくものよそなる身なれどもたつときくこそうれしかりけれ  
さかりなる秋の宮とてゆるさるゝ草のにしきの袖ぞなまめく

○將軍

いくさの君

○ちかきまもりのつかさ

○あださりひしぎ

○大君のへにこそしなめ

○かへりみはせとさこさだて

○八十件の男をあごもふ

○八十件男

○ものゝふ

○物部の八十件男

○おみのたけな

○國のまもりの君

○天の下うべあらけし

○みいつたけびて

○なしく

○なたけびして

○大君のしこの御櫓

○ますらたけな

○海ゆいばみづくかばれ

○山ゆいば草むすかばれ

○ものゝふの大まへつ君

○天下あけて

○弓さりとたし

○ゆぎさりおひて

○弓矢かくみて

○すめらみくさ

○大國のまもり

○大君のまもり

○大君のまほのまもり

○伴の男つかさく

○伴の男ひろき

○あごもふ

○千早ふる人をまむ

○まつるはぬ人を和す

万同同勅

○臣

世をしづめます  
大君のまけのまにく  
ますらをのとも音すなりものゝふの大まへつきみ楯たつらしも  
もゝのふのをみのたけをは大君のまけのまにくきくといふものを  
千萬のいくさなりともことあげせずとりてきぬべきたけをとぞおもふ  
山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも  
弓はりの光し空にありければ鳥のねぐらのあらそひもなし  
事しあれば武きみいづをかやかしけむ平ぐる御軍のきみ  
大君になびきつかふるしとや柳のいほをたてゝますらむ  
むさしのゝ草のかきばもことやめてなびくは今も神の御代かも

○くものうへ人

○ほしのくらゐ

○なす國のこさざりもちて

○まつりごち

○ものゝふ

○おもしろ

○こものみやつこ

○くにのみやつこ

○おみむらし

○ものゝふの八十件のを

○ものゝつかさ人

○八十件の男

○せきのしらゆき

○みかさ山

○大みや人

○宮人

○もゝしきの大宮人

○大まへつきみ

○大君につかへまつる

○まへつきみたち

○つかさたまふ

○くらゐ

○さす竹の大宮人

○大君のまけのまにく  
大君にまつるふものさこさものを

万

ふる雪のしらなみまでに大君につかへまつればたふとくもあるか

橘宿禰

勅 同 同

さす竹の大宮人の家とすむ佐保の山をばおもふやもきみ  
島山にてれる橋うづにさしつかへまつるはまへつぎみたち  
くもりなき星の光をあふぎてもあやまたぬ身を猶ぞうたがふ  
君にをしへ四方にかゝみのその人とあふくぞおほき大まへつきみ  
たかみくら左右にあなゝひてたすけまつらす大まへつきみ  
天のごと君をあふぐも地のごとしたがふ臣のあればなりけり  
位山たかきみねより吹風になびかぬ草はあらじとぞ思ふ

足 八 後 大 春 重 魯  
人 東 京 平 門 胤 道

○武士

ものゝふ

- 八十伴の男
- ますらを
- たけく
- たけふ
- 号矢とる
- ますらたけを
- をしく
- 千名の五百名
- つるぎだち
- ゆきおふ
- をこゝろ
- たちばく
- かへりみぬ

万 ますらをを名をしたつべし後の世にきよつぐ人も語つぐがに  
 同 つるぎだちいよゝとぐべしいにしへもさややくおひて來にしその名ぞ  
 同 から國にもきたらはしてかへりこんますらたけをにみき奉る  
 同 ますらをのゆく道ぞおほろかにおもひてゆくなますらをのとも  
 同 とらほゆる國のさかひも武士のまもるかざりは安けかりけり  
 同 夜のももり日のまもりにとさぶらひて御門べさらぬものゝふのとも  
 同 月花のかけにもあそべ弓馬の道平らけき御代のますらをを

よみ人  
しらす  
家持  
聖武天皇  
古 道  
春 門  
有功 卿

○民人 たみ

- 君がみたみ
- 民のしわざ
- あき人
- あま
- 御民われ
- しつのな
- 手びさ
- 人草
- おをみたから
- しづのめ
- たくみ
- うつしき大御寶
- しづ
- 木だくみ
- まつろふ民
- 山がつ
- 木こり
- 民のいこなみ
- 田人
- 衆人

万 御民われいけるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらくおもへば  
 同 あし引の山田つくるこひですともしめだにはへよもるとしるがね  
 同 高きやにのぼりてみればけふりたち民のかまとはにぎはひにけり  
 同 なはしろの水はいなゐにまかせけり民安げなる君が御代かな  
 同 あし原やみだれし國の風をかへて民の草葉も今なびく也  
 同 天下めぐみあまねき君が代にますらむたみのかざりしられず  
 同 玉しきの都の外千里まで住あまりぬる御代の民かな  
 同 千頃の消ゆけばこそ一日にも千五百かしらをうみ給ふらめ  
 同 御國はし日の神國と人草の心も直し行ひもよし  
 同 日のまもり夜のまもりに國やすく民草さはに立榮へつゝ

阿麻呂  
よみ人  
しらす  
仁徳天皇  
院 頼  
尊 晴  
直 兄  
順 長  
宣 長  
有功 卿

○隠士

かくれびと

- 世をいさふ
- 世をそむく
- そむくさて
- かくれすむ
- こもりぬ
- うき世をよそ
- うき世の外
- 世をうしこ
- くれなぬのちりの中



身をすつる人はまことにすつるかは捨ぬ人こそすつるなりけれ  
世の中を心だかくもいとふかなふじのけぶりを身のおもひにて  
そむくとて雲にはのらぬものなれど世のうきことぞよそになるてふ  
立さわぐ市のちまたを心からみ山になしてすみやすげなり  
草の戸にとひこむ人はかりにてもことしげき世のことなかりそ  
おほよその人数にしもよまれぬは世にしられぬのさちにぞ有ける

○僧 淨侶 のりのし

- 昔の衣 ○墨染の袖 ○墨染の袂 ○雲水 ○のりの身 ○山ぶし
- 麻のきぬ ○み山がくれ ○心をすます ○心すし ○塵をいこふ ○草のいほり
- 岩根のこけ衣

古 なたちこそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ  
後 たらちねはかゝれとしてしもぬば玉のわが黒髪はなてすや有けむ  
勅 さい波やしがの浦風いかばかり心のうちに涼しかるらむ  
かきつくるあとに光のかやけはくらき道にもやみははるらむ  
雲とゆき水とながれて定めなくこなたかなたに墨染のそで  
たのもしくおもひふかめて木のはしを横川の水にたれわたすらむ  
松のこゑ谷の清水の音きゝて横川のほらに年ぞへにける

○尼 あま

築 昭 任 辨 寛 樹 蔭  
公 昭 任 辨 寛 樹 蔭  
高 辨 寛 樹 蔭  
正 寛 樹 蔭  
芳 樹 蔭  
千 蔭

○うきめをみつのおま ○心あるあま ○五の障いさふ ○あまになる ○そのかみの玉のかざし  
○花の袂を打かへし

古 我を君なにはの浦に有しかはうき目をみつのあまとなりనికి  
後 おとにきく松が浦島けふぞみるうへも心あるあまはすみけり  
新 そのかみの玉のかざしを打かへし今は衣のうらをたのまむ  
あはれ也たけにあまりし黒髪のいろのみのこる墨染のそで

○仙人 やまびと

- 春秋もしらぬ ○をのゝえくたす ○雲をすふ ○かすみをくらふ ○まここの國
- まここのくに ○まここのしま ○松とつるこの ○高きよほひ ○まここの山人
- はこやの山

万 としへに夏冬ゆけやかは衣あふぎはなたぬ山にすむ人  
後拾 春秋もしらで年ふるわが身かな松とつるとのとしをかぞへて  
新 春秋もしらぬときはの山里はすむ人さへやおもがはりせぬ  
山人のしなぬくすりとのむ酒やうき世の外の色にいづらむ  
たつ雲もよの常ならずみゆるかなこや山人のすみかなるらん  
いひしらぬ春のすがたを三千年のものゝ園生にわれやきぬらん

○行客 みちゆき

- 野ゆく ○山ゆく ○みちのゆきあひ ○道すがら ○旅ゆく人 ○たゝずむ

よみ人 盛  
しらす 盛  
兼 盛  
元 方  
幸 年  
正 徳  
有功 痛

○みちのゆくて ○行ずりの袖

後拾

道すがらおちぬばかりにふる袖のたもとに何をつゝむなるらむ  
いつとなきをぐらの山のかげをみてくれぬと人のいそぐなる哉  
しらくものよそにみえぬる山のはを月とよにもこゆる夜は哉  
いくたびかひとつ流を右になし左になしてけふは來ぬらん

よみ人  
しら  
命

○匠

たくみ

○木だくみ ○石だくみ ○飛だのたくみ ○てをの ○をのさる ○宮つくる

○飛だ人

拾 万

かにかくに物ぞおもはずひた人の打墨なはのたゞ一すぢに  
宮つくるひだのたくみがてをの音のほどくしかる目をもみる哉  
神の代のまなしかたまもあし舟もつくりいづべき竹だくみ哉  
すみなはの正しきすぢをつたへなばあらぬ工をなすなひだ人

よみ人  
しら  
茂

○商客

あきびと

○市にたつ ○うる ○うりかふ ○かふ ○うきにかふる ○さばぐ ○いさなむ

万

西の市にたゞひとり出てめならはすかへりしきぬのあきじこりかも  
四方の國しづかなる世も市人のさわぐにつけて思ひしる哉  
海山とさちをかへしや千早振神代のあきの始なるらむ  
その葉さへかれせぬ市の橋にみのなりはひやたぐへみるらん

よみ人  
しら  
保  
彦  
彪

○樵夫

きこり

○柴人 ○柴かるをのこ ○木こり ○薪こる ○しづのを ○つま木はこぶ

○うたふ山人 ○つま木の風柴 ○やすむ柴人 ○かへる山人 ○なげきこる ○柴こる山

○谷川のつまぎの舟 ○まつの葉拾ふ ○柴舟の跡よりおつる ○柴舟 ○そばつたひ

○花をつま木に折そへ ○聲をかばしてかへる ○谷のかげぢ ○そはつたひ

○ひざりくかへるさ ○かへる木こり ○柴よせかけて ○こる斧のえ

類

薪とるかへるさくれて急ぐにや同じ山ぢもけふのはるげさ  
君が代のためしとこそやまがつもなげきはこらでたのしきをつめ  
朝もふにかよふ山がつとしをへておもる眞柴も老はしるらむ  
山がつのうたふしよばおもからし聲みだれても吹あらしかな  
朝夕のけふりはをのにまかせてもなほたてがたき世を歎哉  
高根より眞柴の露にやどりこし月もみ谷にかげとめけり

後柏原院  
長 廣  
永 章  
景 樹  
尙 忠  
千 隆

○狩獵

かりびと

○朝がり ○夕がり ○さつを ○さつ矢 ○さつ弓 ○山さち

○まぶしきす ○いめたてゝ ○せこ ○あちちを ○もま山

手束弓手にとりもちて朝がりに君は立いぬたなくらの野に  
あられふる玉野の原にみかりしてあまの日つぎの賛たてまつる  
あし引の山にも野にもみかりしてさつ矢手挟みさわぎ立み也  
みかりたつ眞弓が岡の矢さげびに空とぶとりはかげだにもなし

よみ人  
しら  
茂  
人

○海士 蟹 白水郎 あま

- あまのすくも火 ○あまのかるも ○めかり鹽やき ○あま子 ○あまなごめ
- 鹽やく ○鹽たるゝ ○あまのいさり火 ○あまのつり舟 ○あまのすて舟 ○あまのなばたき
- あまのふせや ○鹽くむ ○みるめかる ○めかる ○あみひく ○あびきする
- あまのよび聲 ○あま小舟 ○あまのまてがた ○宿もさだめず ○あまのたはれを ○あまのたく火
- かづく ○あまのたくなみ ○つりするあま ○あまのこまや ○うたふあま ○あまのぬれ衣
- ぬれ衣 ○あまごろも ○鹽やき衣 ○いそ菜つむ ○貝ひろふ ○いせのあま
- いせをのあま ○みつのあま ○野下あま ○しかのあま ○しかつのあま ○なぐまのあま
- すまのあま

万 同 同 同 同

しかのあまはめるも鹽やさいとまなみくしげのをぐしとりもみなくに 石川 耶女  
 これやこの名におふなるとのうづしほに玉もかるとふあまをとめども 秋 庭  
 わたつみの沖つしら波立くらし海士をとめども鳥かくるみ也  
 朝なぎにかちの音きこもみけつ國ぬしまが崎の舟にし有らし  
 海をさと船を家にて月雪につりするあまの身こそ安けれ 赤 人  
 いづの海の磯山つゝきわけいれば谷ぶところにあまはすみけり 直 徳  
 朝ざりのかをりみちくる潮さぬにいせをのあまの舟出するみ也 信 友  
 まじはりてならひしごとく鴉をみつゝやあまもかづきそめけん 尊 孫  
 はかりなき千尋の海の底までもいたるぞあまの心なりける 春 夫

○愧儡 くいつ

堀

- 旅やかた ○旅れの友 ○一夜あかす ○うかれてありく ○やざかりそめ ○野路のたびれ
  - くれがたの空 ○河ぎしの ○涙のよるく
- 一夜かす野上の里の草枕むすび捨たる人のちぎりを 定 家  
 鏡山雲にわかるゝあか星のあからさまなる身のちぎりかな 美 隆  
 今ぞしる野上の里の朝露はたひ行人のなみだ也けり 尊 孫  
 定めなくなく野上のしのすゝきいくその人の枕かるらむ 安 守

○遊女 妓女 うかれめ たはれめ

- うきたる契 ○波の上に結ぶ契 ○一夜づま ○ひと夜あふ ○うきふね ○波まくら
- 跡もさめず ○月にうたひてこぐ舟 ○よるへ定めず ○よせてはかへる ○たれさなく
- あそびめ ○たはれづま

新 同

しら浪のよするなぎさに世をつくすあまの子なれば宿も定めず よみ人  
 ひとりねのこよひも明ぬたねとしもたのまでこそはこぬもうらみめ しら ず  
 おもしろくまつとうたへどなしきは世にうかれめの心也けり 爲 忠  
 花紅葉折にふれたる手遊びも色をならふと人やみるらん 景 樹  
 あさなくむかふかひみにいつはりのうつらばいかにやさしからまし 直 養  
 明くれに人のうきのみなぐさめて何になぐさむうき身なるらん 美 卿  
 女郎花うしろめたさをみせがほになまめき立るあだくらべ哉 桐 麻呂

○親 おや

- ちよ
- かそいろは
- 人のおや
- はよ
- たらしね
- さほつおや
- ちよはよ
- はよき木
- みおや
- たらしねの母
- ちよのみの父
- はよそはのはよ
- あもま

万 春草は後はかれ安しいはほなすときはにいませかしこきわが君  
 一世には二たびみえぬ父母をおきてやながくあがわかれなむ  
 ときくの花はさけどもなにするぞ母とふ花のさかでこすけん  
 千早ふる神のみ坂にぬざまつりいはふいのちは母父がため  
 人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな  
 父母はわが家の神わが神と心つくしていつけ人の子  
 たらちねの親の心を子を思ふこころづがひにたぐへてぞしる

市原王 眞麻呂 忍男 筑輔 宣長 盛彬

○子孫 こひこ

- むすこ
- みどり子
- いわけなき子
- なでしこ
- うみの子
- わく子
- わかたけ
- なまなこ
- 眞名子
- はしき子
- 若草
- かたいざりする
- 小松
- 子にしかめやも
- やひこのつぎく
- 二葉の小松
- 竹の子
- うなぬ子
- おひさき

万 白がねもこがねの玉も何せんにまされる寶子にしかめやも  
 ことよはぬ木すら妹とせありとふをたよひとり子に有が苦しさ

市原王 眞

古 世中にさらぬわかれのなくも哉千代もといのる人の子のため  
 後 なでしこはいづれともなく匂へどもおくれてさくはあはれ也けり  
 後拾 浅ちふにあれにけれどもふる里のまつは木高く成にける哉  
 同 年へぬる竹のよはひをかへしてもこの世をながくなさんとぞ思ふ  
 色に香にまだたどりなきみどり子も母てふ花のかけや戀しき  
 しろがねもこがねもしらぬみどりこは母のちぶさや寶なるらん  
 なにとなく打ゑむかほにみどりこの老ゆく末の色はみえけり  
 かぎりなくかなしき物はみどり子の乳こふ夜はのねざめ也けり

業平 大政大臣 内大臣 冷泉院 美隆 信昌 廣足 春夫

○男 をのこ

- を
- をのこ
- をのこしも
- ますらな
- ますらたけな
- むすこ
- をしく

万 をのこやもむなしかるべき萬代にかたりつぐべき名はたてずして  
 同 これやこの倭にしてはわがこふる木路にありとふ名におふせの山  
 もろこしにすむてふとらもこぶしもて打ひしぐべき男とぞおもふ

眞直 阿閉皇女 正直

○女 をみな

- め
- をみなべし
- めにしあれば
- ぬえ草のめ
- 春草のめ
- めのこ
- 若草のめ
- をみなご
- たわやめ
- たをやめ
- むすめ
- めよしく

万 ふち原の大宮づかへあれつがむをとめがともはともしきろかも  
 同 川のべのゆついはむらにこけむさすつねにもがもなとこをとめにて

よみ人 吹黄刀目

秋風をうちもたのまばをみなべしみつにしたがふ末やたがはん  
たをやめの人もなげなるよそほひに心たかさもあらはれにけり

芳樹 孫

○老人 老翁 おいびと おきな

- おゆる ○老らく ○老が身 ○老が世 ○老の涙 ○老の坂
- 老はれ ○老さらばふ ○老のれぶり ○老のれざき ○友なき老 ○老にける身
- しらぬ翁 ○みつわぐむまで ○翁さび ○老のすさみ ○まれのよそひ ○ふりたる翁
- かいらの雪 ○霜のしら髪 ○しら髪 ○わが世ふけ行 ○山より高き翁 ○おごるの髪
- 霜のよもぎ ○もさゆひの霜 ○老のかず ○さしなつむ ○昔がたり ○ふる人
- 老そのもり ○世のなが人 ○なが人 ○ふりたる翁 ○霜の翁 ○老のちから
- 老のいのち ○老ぬる身 ○老さなる ○ましらが ○しらがみまでに ○老のつま木

万 物みなはあたらしきよした人ふりぬるそこれよろしかるべき  
古 世の中にふりぬるものはつの國のながらの橋とわれとなりけり  
後 翁さび人などがめそかり衣けふばかりとぞたづもなくなる  
同 としふればわがくる髪も白川のみつわぐむまで老にけるかな  
金 としふればわがいたいきにおく霜を草の上ともおもひけるかな  
新 あし引の山下水にかけみればまも白たへにわれおいにけり  
代 しるや君ほしをいたやく年ふりて我よの月も影たけにけり  
老ぬれば心をさなくなりぬるを若がへれりと人のいふらむ

よみ人 しらす  
行 垣 平  
能 因 實  
後 京 極  
清 香

月花のむかしがたりも世にあはぬおきなことゝや人の聞らむ  
くもかゝる山とはならでちりの身のとしのみ高くつもりぬるかな  
老そめてふみゝるためにうれしきは曉ごとのねざめなりけり

美隆 久胤 良臣

○友 とも

- 友がき ○友たち ○友ごち ○心の友 ○へだてなき ○へだてぬ
- こふ ○こはるゝ ○したしき ○おもふ友

かたらはんふしもあらねどもきかふや相思ふどちの心なるらん  
中々に詞まれなる圓るかなおもふかぎりはかたりつくして  
おもふ友あらばうれしき世ならましありのすさひは有世ながらに

濱臣 尙忠 眞淵

○遠情 とほきをおもふ

- くもぬの空 ○遠き雪路 ○千里の外 ○遠き境 ○はるかなる ○ほのかなる
- もろこし ○ゆくこゝろ ○おもかけにたつ ○おもかけにうかぶ ○はてもなく ○夢
- 月 ○雪 ○花 ○もみぢ ○おもひやる

あしべゆく鳴の羽がひに霜ふりて寒き夕は和しおもほ也  
わがせこはいづくもくらん奥つ物なばりの山をけふかこもらん  
ふる里の板間のかせにねざめして谷のあらしをおもひこそやれ  
おもひやる千里の外秋までもへだてぬ空にすめる月かげ  
おもひやる心の道の海山はみざる所をかぎりなりけり

志貴皇子 麻呂妻 定頼 俊頼 孫

さよあらしふくらむかたの空とへばまつにこたへてあはれそへけり  
 古郷にあらぬ物から月花に都の空ぞおもひやらるゝ  
 藤 賢  
 桐 麻 呂

○眺望 ながめ

- 打わたす ○見わたす ○かぎりなき ○はるく ○はるかなる ○刈のかなる
- 千里の空 ○雲のまがふ ○空をかぎり ○立てこそみへぬ ○野 ○山
- 海 ○川 ○みるがうちに ○みるく ○目路遠く ○ながめにくるゝ
- 野も山も ○浦の浪間 ○はなれたま ○を花が末に ○ほのみえて ○霞の間より
- きりのたえま ○浪間にみゆる ○違山 ○むら山 ○をちかた ○霞
- さきり ○朝なき ○朝ぼらけ ○夕なぎ ○山もいくへ ○夕けぶり
- 浦のげぶり ○あまのこまや ○海原 ○青海原 ○なみち ○海ごしの山
- 山もこの里 ○わたる白鷺 ○いさり火 ○つり舟 ○末の川渡 ○ふもこの里
- 島かくる ○沖の小島

万 同 同 古 詞 千 新  
 なにはどをこき出てみれば神さぶる生駒だかねに雲ぞたなびく  
 玉つしま見れどもあかすいかにしてつゝみもてもかむみぬ人のため  
 天さがるひなの長路も戀くれば明石の門より倭島みも  
 天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出し月かも  
 かざごしの山の上にてみる時は雲は麓の物にぞありける  
 わたの原汐路はるかに見わたせば雲と浪とはひとつなりけり  
 時しらの山は不二のねいつとてかかのこまだらに雪のふるらむ  
 三 成  
 よみ人  
 人 麻 呂  
 仲 麻 呂  
 家 經  
 頼 輔  
 業 平

同 勅 代  
 若の浦を松の葉ごしにながむれば梢によするあまのつり舟  
 わたの原浪とひとつに熊野の浦の南は山の端もなし  
 みわたせば夕日ぞのこる住吉のきしにむかへる淡路島山  
 はりまがたせとの入日の末はれて空よりかへるおきのつり舟  
 たきの音も間遠にくれておく山のいはほにのこる夕日影哉  
 萬代になるとの海にたつ浪の底より出ぬ朝日かげかな  
 二見がた明るあしたの庭をよみふじのね遠くみさけつるかな  
 わたつみのはての遠山ほのかにも入日のかげにあらはれにけり  
 ながむれば夕暮深く成にけり外山のおくのまつのみら立  
 寂 蓮  
 入道前大政  
 家 隆  
 眞 淵  
 俊 子  
 廣 海  
 千 枝  
 斐 雄  
 久 秋

○旅 旅宿 旅行 鞆中 たび

- 旅だち ○旅のいそぎ ○たちのいそぎ ○草枕たび ○草まくら ○旅友
- 山分衣 ○旅のさも ○旅枕 ○かり枕 ○かりね ○かりれの床
- 松がれ枕 ○岩がれ枕 ○さゝ枕 ○朝たちくれれば ○朝たつ ○夕こえくれれば
- 草引むすぶ ○草むしろ ○衣かたしく ○かたしく袖 ○みやこいづる ○みやこの空
- 山をこゆる ○野を分る ○岩根ふむ ○ひなの長路 ○行くるゝ道 ○あすこえん山
- したはしき都の山 ○國おもほゆる ○家路 ○ゆきなやむ ○野べのかりぶし ○木陰にやすらふ
- いこふ ○山松かけ ○並木のかけ ○並まつ ○旅ぬ ○一夜の宿
- やぎよはむ ○さけてれぬ ○かれいひ ○日敷ゆく ○いく海山 ○朝たづのべ
- 朝ゆく旅 ○曉おき ○浦分衣 ○うらづたひ ○道行づれ ○野くれ山くれ

- 枕のあらし ○馴ぬあらし ○かりれの夢 ○みやこの夢 ○岡のかや根 ○里さひかぬる
- 雲にやぶかる ○かはる野山 ○かはるあらし ○手向の神 ○手向する ○みちのちまた
- ちまたの神 ○ぬき袋 ○きりぬぎ ○ゆふけぶり ○里のしるべ ○つかるゝ道
- あゆたつくり ○國 ○ふるさこ ○家人 ○家路にいそぐ ○心あてなる山
- つゝがなく ○つゝみなく ○眞幸く ○まぢ酒 ○かぞ出 ○かぞ出する
- かへる ○關ふく風 ○關こゆる ○關の八重山 ○旅のづこ ○家つこ
- 旅路のなやみ ○物こひしき ○家なる妹を ○おもふあたり ○おもふそら ○なびきし妹を
- まつらむ人 ○はしきこらほも ○ゆく

山越の風を時じみぬる夜おちず家なる妹をかけてしぬみつ  
 家にあれば筒に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる  
 岩代の濱松がえを引むすびまさきてあらば又かへりみむ  
 天さかるひなに五年すまひつゝ都のてぶりわすらえにけり  
 秋の野にやどる旅人打なびきいもぬらめやもいにしへおもふに  
 かりくらし棚ばたつめに宿からむ天の河原に吾はきにけり  
 旅ゆけば袖こそぬるれもる山のしづくにのみはおふせざらなむ  
 さ夜更て峰のあらしやいかならん汀の浪は聲まさるなり  
 かり衣袖のなみだにやどる夜は月も旅ねのこゝちこそすれ  
 かくばかりうき身のほどもわすられてなほ戀しきは都なりけり  
 みるまゝに山風あらくしぐるめり都もいまは夜寒なるらん

軍 王  
 有馬皇子  
 同 眞  
 人 麻呂  
 業 平  
 よみ人  
 しらす  
 道 濟  
 崇徳院  
 康 頼  
 大上大皇

なには人あし火たくやに宿かりてすゝろに袖の鹽たるゝかな  
 としたけて又こもべしとおもひきや命なりけりさ夜の中山  
 大君の命かしくき玉藻なすなびきねしこそおきそきにけり  
 都出て露をいかにとおもひしにしぐれふる也宮城野の原  
 やどるべきさとのけぶりもみえなくにおほえすくるゝ旅の空かな  
 わぎも子がまゆ引なせるふる里の山の端みえていづる月かな  
 かぎりなく並木の松の見ゆるかな嵐の下に日をやくらさむ  
 きのふまでたえぐみえしふる里の山にもけふは別れぬるかな  
 おもかげのわすらるまじき朝日かな生田のおくの有明の月  
 朝まだきたのみし月の影きえて遠ざかりきぬまつのみら立  
 草まくら露をあるじとやどかればしらぬ野山もおもなれにけり  
 岩がねのなれぬ枕も有ものをいたはりしらぬみねのまつかせ  
 ふるさとの夢のさかひに入まじの旅ねの枕ふくあらしかな

○旅泊

ふねのとまり

- しほのなほり ○うら波さばぐ ○さまり舟 ○かぢ枕 ○磯まくら ○浪まくら
- うきれ ○大舟 ○いつて舟 ○小舟 ○うきれの夢 ○しほかぜ
- うきれの枕 ○磯れ ○あらいそ ○磯のうきれ ○舟さめて ○みやこの夢
- 八重の沙ぢ ○沙ぢゆく ○こぎくれて ○こゝちをさまり ○舟はてゝ ○みなさ舟

俊 成  
 四 行  
 宣 長  
 眞 淵  
 信 敬  
 尊 澄  
 知 紀  
 千 尋  
 光 輔  
 久 秋  
 依 平  
 景 樹  
 有功 卿

庭中のあすはの神に小柴さしあれはいはんかへりくまでに  
 内日刺みやこの方へつげまきは見し日のごとく有とつげこそ  
 あすよりはわれは戀なむ直入山岩ふみならし君がこえいなば  
 天地の神もたすけよ草まくら旅ゆく君が家にいたるまでに  
 すがるなく秋の萩原朝たちて旅行人をいつとかまたむ  
 雲るにもかよふ心のおくれねばわかると人にみゆばかりなり  
 此たびもわれをわすれぬ物ならばうちみんたびに思ひ出なん  
 家ながらわかるゝ時は山の井の濁りしよりもわびしかりけり  
 戀しさは其人數にあらすともみやこをしのぶかすにいれなん  
 よろこびをくはへていそぐたびなればおもへどえこそといめざりけれ  
 月かげの山のは出てかくれなば背くうき世をわれやながめむ  
 もろこしも天の下にて有とさきてる日の本をわすれざらん  
 なにとなく旅おもほゆる春の日にうら山しくもいづる君かな

諸人 山背王 山背王 山背王 山背王 山背王 山背王 山背王 山背王 山背王  
 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父  
 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之  
 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼  
 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院  
 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母  
 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤

大君のみことかしこみ大船のゆきのまに／＼やどりするかも  
 海原にうきねせむ夜は沖つ風いたくな吹ぞ妹もあらなくに  
 むろの沖のせとの崎なるなぎ島の磯こすなみにぬれにけるかも  
 あはちの野島のさきの濱風に妹がむすびし紐ふきかへす  
 みやこにて山のはにみし月かげをこよひは波の上にごそまで  
 浦つたふ磯のとまやのかちまくらきよもならぬなみの音かな  
 さよふけてあしの末こす浦風にあはれ打そふ浪の音かな  
 あら磯の夜舟の床はふるさとの夢もくたくる浪の音哉  
 なつかしき妹が家島よそにみて室の泊に舟やはつべき  
 風あらししかまの磯の浪枕ね覺がちなる秋もへにけり  
 ふる里の夢はくだけてかちまくらかきねにかへる浪の音かな  
 妹がしまかたみの浦の名をさけばうきねとだにもおもはざりけり  
 大舟におろす碇のおちゐてもねられぬ夜はの雨ぞよきかな

宅麻呂 宅麻呂 宅麻呂 宅麻呂 宅麻呂 宅麻呂 宅麻呂 宅麻呂 宅麻呂 宅麻呂  
 山背王 山背王 山背王 山背王 山背王 山背王 山背王 山背王 山背王 山背王  
 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父 源養父  
 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之 貫之  
 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼 俊頼  
 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院 三條院  
 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母 成尋母  
 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤 重胤

別送別 餞別 わかれ わかれをおくる 馬のはなむけ

- 立われ
- わかれかなしき
- えやはさむむる
- 心ばかりはおくれぬ
- わするなよ
- 家ながら
- 見おくる
- そふるこころ
- いづちもしらぬ
- 君がゆく
- をしむさて
- 心なたぐふ
- わかれをおくる
- われやおくる
- さきだつ涙
- みらはゆるかに
- 君にたぐへて
- かぎりなく
- おもひのこせよ
- おくれむものか
- いつをまでさか
- くもぬのよそに
- みず久ならば
- もろさもに
- はれぬ思ひ
- 君がゆくへに
- ゆくをよしみ
- おもひ出なん
- 浅からぬ
- おくるこ袖
- わかれ路は



さねかづら又もあふべく玉のをの長きいのちをともしたのまむ  
 露深きわかれの袖にあたら夜の月のかげをもしほりつるかな  
 むさし野の夏野のしけく思ふ事いふべき人にけふやわかれむ  
 といめてもとまらぬ袖にたび衣ぬひてきせたる人さへそうき  
 魯 年 道 有 眞 平 淵 功 淵 卿

○留別 わかれをとむ

- かへりきて ○ほごもなき別だに ○女子をおきて ○心をも君をも ○わかれゆく
- 心をやさにごむ ○おきていなば ○よそにのみ ○くもぬのよそに ○よそにても
- あすかこえなん ○わかれなば ○ほごふれば ○おぼつかなきは ○目にたまらぬは涙
- いまはさて ○今かへりこむ ○まつさしきかば ○いきうしさいひて ○いざかへてむ
- ゆくさきを ○えこそさまらね ○心を置て ○ゆく末 ○まさきくて
- 身のゆくへ ○わすれよき ○相みむまでは ○君をおきて ○こまるべき
- 君を思ひ出む ○いつ相みむさ ○ながらへて ○かへりこむほご ○別よりまさりて
- しのばれむ ○われを忘るな ○心を君にごむ ○物おもはしき ○なみだばかりぞ
- しのばれぬべき

万 古 同 拾 後拾  
 たらちねの母をわかれて誠われたびのかりほにやすくねんかも  
 としをへて住こし里を出ていなばいと深草野とやなりなん  
 人やりの道ならなくに大かたはいきうしといひていざかへりこむ  
 わかれゆくけふはまどひぬあふ坂はかへりくる日のなにこそ有けれ  
 とまるべき道にはあらず中々にあはてぞけふは有べかりける  
 道 貫 信 之 平 中

千 新  
 かへりこんほどをばいつといひおかじさだめなき身は人だのめなり  
 たのめおかん君も心やなぐさむとなげかんことはいつとなくとも  
 ちく末の野山の露をはらふべき袂はくちぬけさのわかれに  
 出てもく袖の涙のふる里をあすやくもゐるよそにしのばむ  
 わかれ行て又はつかりとよもにこんめづらしとおもふ人もありやと  
 眞 秀 成 西 行 淵 雄 章 行 重

○形見 かたみ

- わすれがたみ ○かたみの水 ○あはぬまのかたみ ○たのむ扇のかたみ ○面影の身にそふ
- 中々のおもひ ○おくれける身は ○そのかみを ○みるたびごこに ○ふるきあこ
- なみだのかたみ ○君がたみ ○妹がたみ ○旅の形見 ○なき人のかたみ
- みてもしのばん ○こまるかたみ ○見つしのべご ○影だになごか ○埋れぬ名
- かたみのふみ ○形見がてら ○みる ○ごりいで、 ○おもひ出多く

万 同 後 拾 同 新 同  
 眞草かるあら野にはあれどもみちばの過にし君が形見とそこし  
 高圓の野への秋萩なちりそね君が形見に見つゝしぬばん  
 なくこゑにそひてなみだはのぼらねど雲の上より雨とふるらん  
 ちく末の忍ぶ草ともなるやとて露のかたみもおかむとぞ思ふ  
 なき人の形見とおもふにあやしきはゑみても袖のぬるゝなりけり  
 手すさびのはかなき跡と見しかども長き形見になりける哉  
 露をだに今は形見のふち衣あだにも袖をふくあらしかな  
 人 麻 呂 秀 武 宮 之 君 元 輔 伊 勢 土 御 門 右 女 秀 武

在し世はおもはざりけんかきおきてこれを形見と人しのべとは  
着そむるもはかなのわすれがたみ哉見せばやとおもふ人はなき世に  
ともすれば思出らるゝ心こそすぐしてし世のかたみなりけれ

○心 こころ

忠 度 成 臣 草

- よろこぶ ○いかる ○かなしぶ ○うらぶれて ○かはる ○うるはしく
- うけく ○心をたにも ○くろし ○うれし ○たぬし ○つらし
- なぐさむ ○なぐさめかたき ○まごふ ○はるゝ ○定めなき ○かなし
- はふらさど ○心は消ぬ ○心づかひ ○心ひきつ ○心さなさば ○心よりやは
- 心みだれん ○心のおもひ ○あはれ心 ○心ぶから ○心淺く ○心づかひ
- 心なぐさ ○心ぐし ○かはる ○うつる ○はかなき ○うれひ
- おもひ ○心さ敷く ○わが心 ○粹の御心 ○人の心 ○おもしらぬ
- さかしく ○かしこく ○ささく ○おそき ○おろかなみ ○心もしらぬ

古 後 新 同

身はすてつ心をだにもはふらさじつひにはいかやなるとしるべく  
人心たへてみれば白露の消る間もなほ久しかりけり  
杉もすぎ宿も昔のやどながらかはるは人のこころなりけり  
一方におもひとりにし心には猶そむかるゝ世をいかにせむ  
つくぐとおもへば安き世中を心となげくわが身なりけり  
ふたつある物ならなくに千々にさへくだけ安きは心也けり  
おろかなる心もいかにでおくるべき御代万代とあふぐばかりは

興 風 よみ人 樹 直 長 延 政 直 樹 延 政 直

○幽思 かすかなるおもひ

天地のわかれて遠きいにしへも空にはかるは心なりけり  
わが心似たるものあり大空をむなしとのみも思ひける哉

芳 久 景 樹

- ながめわび ○うきみのくせ ○我をもしのぶ人である ○をしまるゝ命 ○淺ましや
- 身のほどな ○うしこても ○おもひしる ○世を思ひしる ○よそにおもはゞ ○おもふにも叶はぬ
- わればかり ○しづむ身こそ ○又ありけりさ ○ともかくも ○おろかなる心のひく
- 世にふれば ○こりこめて ○何おもふさは ○おもひすつれど ○心のはて ○おしかへして物を思ふ
- かきもやられど ○歎かぬ時のあるみ ○いかにせむ ○おもひやれども ○しかすがに ○ゆく末は
- あなうさ ○袖のみぬるゝ ○心まごひ ○方もしられず ○あはれなりけり ○我ながら
- 身のうさ ○いばではえこそ ○おもひやる ○おもふにも ○なみた

古 後 千 新 同 勅 同

とりとむるものにしおらねばとし月をあはれあなうと過しつる哉  
おもひやる方もしられずくるしきは心まごひの常にや有らん  
身のほどをしらずと人や思ふらんかくうきながら年をへぬれば  
なさけ有しむかしのみ猶しのばれてながらへまうき世にもふる哉  
おしかへし物を思ふはくるしきにしらすかほにて世を過まし  
四方の海を硯の水につくすともわがおもふ事かきもやられじ  
いかにせむあめの下こそすみうけれふれば袖のみ間なくぬれつゝ  
世のちりをはらひはてけむあらしも心の内にとしをへにけり

よみ人 樹 直 宗 家 四 行 攝 政 俊 成 和泉式部 廣 足

村雨は袖にのこりて山の端の雲ぞ夕のそらにきえゆく

○感思 かまくるおもひ

有功卿

- かまくる ○心にかまく ○あはれ ○おもひしる ○うつる心 ○心をよする
- あはれこそ思ふ ○浅ましや ○こころわりこそ ○うしきも ○うき世 ○世のこころ
- 古 わが身からうき世の中と歎つゝ人のためさへかなしかるらむ
- 後 あはれてふことにしるしはなれどもいはではえこそあらぬ物なれ
- 後拾 しのぶべき人もなき身はあるをりにあはれ〜といひやおかまし
- 世をすつる心は猶ぞなかりけるうきをうしとは思ひしれども
- 世の中をおもふもくろし思はじとおもふも身にはおもひなりけり
- うつせみの人のうへをばきけばうしわれもさながら岩木ならねば
- 若葉ふく風もかをりて夏の日の夕かげ清きわが心かな
- よしあしにうつるならひをおもふにもあやふきものは心なりけり
- 兼定 和泉式部
- 本院侍従
- 由之
- 魯道
- 謠
- 閑

○述懐 おもひをのぶ

- 千々のおもひ ○世のれがひ ○道のれがひ ○身のおこたり ○身のほご ○あなう世中
- まごふ心 ○わりなく ○何事を待ごばなしに ○さりさめて ○世をいさふ
- 物ごころ ○うれし ○かなし ○つらし ○つれなき世 ○わかざかり
- おもひつきせぬ ○事しげき世 ○引人もなし ○あればうく ○うしつらし ○思ひみだれて
- 世をなげく ○大かたの ○たゞ大かたに ○物おもはしき ○家の風 ○身をおこす

- うきはならひ ○うしきても ○身はならはし ○心にかなふ ○ふさはなりなん ○いたづらに
- わが世ふけぬ ○わが世くだらぬ ○數ならぬ身 ○數にもあらぬ身 ○いかゞはすべき ○世の中は
- 大かたの世は ○世のまづらひ ○山のおくだに ○み山ゆかしき ○こころなき世 ○君が代に
- いさをたてん ○世のために ○國のため ○大國のみために ○君がみために ○心をしぼる
- 心しなるゝ ○心くだくる ○なほざりに ○たゆたはゞ ○心づよくも ○心なぐきに
- なぐさめかれつ ○なぐさめがたき ○なぐさむるよしなき ○わびぬれば ○わびしちに
- わびしかりけり ○おもへばかなし ○かなしきものを ○身は下ながら ○くもの上まで ○君をおもふ
- ゆたかなる代に ○けなげぬべく ○撞たるゝ袖 ○住わびて ○ありわびて ○うくも有かな
- 塵ひぢの身は ○おほみたからこ ○有はてぬ命 ○なげくさて ○月に物おもふ ○花に物おもふ
- 雪まつもる ○月さゝもにもすむ ○おもひあがりて ○あはれてふ ○えもあへぬ
- のがれえぬ ○世をのがすべき ○おもひ出の ○いさひ安き ○しるもしらぬも ○身のはてを
- はてくは ○おもひ出のふければこても ○かくばかり ○へがたく見ゆる世中
- 身のほごの ○おもひしらるゝ ○かくばかり ○へがたく見ゆる世中

万 しづたまき數にもあらぬ身にはあれど千年にもがとおもほゆるかも 憶 頁

同 かくのみやいさづきをらんあら玉のきへゆく年のかぎりしらすて 同

古 みよし野の山のあなたをやどもがな世のうき時のかくれがにせむ 同 しみ人

同 かならん岩ほの中にすまばかは世のうきことのきこえこざらん 同 すらず

同 なにをして身のいたづらに老ぬらんとしのおもはんことぞやさしき 同

後 たのまれぬうき世中を歎つゝ日かげにおゆる身をいかにせむ 業 平

拾 天つほし道もやどりも有ながらそらにうきてもおもほゆるかな 菅 家

かすならぬ身のうき事は世中になき内にだにいらぬなりけり  
世中はうき身にそへるかげなれやおもひすつれどはなれざりけり  
おのが身のおのが心になはぬをおもはひものをおもひしりなん  
のこりなくわが世ふけぬとおもふにもかたぶく月にすむ心かな  
おもふことなき身ならずはほとよぎす夢に聞夜もあらまし物を  
そむけども天の下をしはなれねばいづくにもふる涙なりけり  
わりなしや人こそ人といはざらめみづからみをやおもひすつべき  
おりきつる雲の上のみ戀しくて天つ空なるこゝちこそすれ  
おもふこといはずたゞにぞやみぬべきわれとひとしき人しなれば  
日の光てらしすてたるうき身にはかげさへそはずなりにけるかな  
すめばまたうき世なりけりよそながらおもひしまゝの山里もがな  
たま〜くに人とある世をともしれば背かまほしくおもふはかなさ  
つるぎだち名をとめずは草木にぞひとしかるべきますらをのとも  
かねの音の聞えぬ山のおくにこそ時なき身をばすつべかりけれ  
たがへじと心のみこそいたまるれ罪をたゞすも神ならぬ身は  
目のまへの世のうきことをしりへ手にとくふりすてゝあく道もがな  
かすならぬものになしてもおもふ事人なみ〜にある世なりけり  
かくばかりうれひなき世をいつはりの有べきものとおもひけるかな

小 辨  
後 頼  
和泉式部  
堀政前  
よみ人  
紫式部  
謙徳公  
業平  
教長  
兼好  
眞淵  
成章  
伴鹿  
定謙  
美隆  
東喜子  
景樹

○懷舊 往事

- ふること ○ふる事しのお ○過しむかし ○身のむかし ○面影しのお ○おもひけにたつ
- 遠きむかし ○いにしへ ○むかしへ ○そのかみ ○その世 ○その世の事
- ふりにし世 ○ふりにし昔 ○ふりにし時 ○かへりこゑ ○かへらぬむかし ○昔がたり
- 昔をのみ ○そのむかしへ ○みし人 ○もろさにもみし人 ○今だにかたる ○今こそ人の
- 世々の面かげ ○過し月日 ○過ほてし ○みし世も遠き ○みし世の影 ○みし世にもあらぬ
- 石上ふるき ○過て又こゑ ○月や昔のしるべ ○おもひいづる ○そのおもひ出 ○おもひ出は
- なみだにのこる ○跡さふ ○跡さふ人 ○なすかけ ○むかしを夢ご ○むかしは夢に
- 夢になりぬる ○心もしぬに ○さはずがたり ○昔おもほゆ ○古おもほゆ ○むかしの春
- むかしの秋

さゝ波の志賀の大わた淀むとも昔の人にまたもあはめやも  
近江の海夕波千鳥ながなけば心もしぬにいにしへおもほも  
岩代の野中にててるむすび松心もとけすいにしへおもほも  
あはれてふことの葉ごとにおく露はむかしをこふる涙也けり  
うゑ置し二葉のまつは有ながら君が千年のなきぞかなしき  
としごとむかしは遠くなりゆけどうかりし秋は又も來にけり  
としをへて君がみなれしますかみ昔のかけはとまらざりけり  
ねざめする身を吹とほす風の音をむかしは袖のよそにきよけん  
もよしきやふるき軒ばのしのぶにも猶あまりある昔なりけり

墨 人  
人 麻呂  
意吉麻呂  
よみ人  
貫之  
重之  
道信  
和泉式部  
順徳院

いにしへの戀しきたびにおもふ哉さらぬわかればかなしかりけり  
大空はくもらすながらながめつゝとしのふるにも袖はぬれけり  
目のまへに昔々となりもきて今なき世こそあはれなりけれ  
いにしへのありのことぐゝかぞふれば年と共にもつもりぬる哉  
昔おもふ老のねざめはあかつきのためしのごとくなりける哉  
御國ぶり今も神代のまゝならんくだらのわにをめさげざりせば  
秋の夜の月にむかしのことゝへば軒のしのぶの露ぞこぼるゝ

後法性寺  
よみ人  
しらす  
景樹  
由豆伎  
尊孫  
枝直  
清義

○夢

ゆめ いめ

- ゆめのたゞち ○夢路 ○夢のわたり ○こてふの夢 ○みどかき夢 ○まごうつ雨
- 山風 ○まつ風 ○さばる ○かやはかなかる ○夢てふもの ○夢のかよひぢ
- 一夜の夢 ○うき世の夢 ○世は夢なれや ○老のれぶり ○夜をのこす ○夢もくだけで
- 夢路にさばる ○夢さのみ ○夢の世 ○見はてぬ夢 ○夢の名こり ○まごるむ夢
- むすぶ夢 ○夢ばかりなる ○みる ○みはてぬ ○さむる ○さめはてぬ
- 夢のうち ○手枕の夢 ○ひさりれの夢 ○夢てふもの ○夢おごるかす ○おごろく
- かれの音 ○さりのれ ○かべ ○あらし ○夢をばかなみ ○ゆめがたり
- 長き世の夢 ○春の夜の夢 ○はかなく

後古万

わぎもこに戀てすべなみ夢みんとわれはおもへどいねられなくに  
うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき  
かなしさのなぐさむべくもあらざりき夢の内にも夢とみつれば

よみ人  
しらす  
小町  
大輪

十 金

ねぬる夜のかべさわがしくみえしかど我ちかふればことなかりけり  
うき事のまどろむほどはわすられてさむれば夢の心ちこそすれ  
世の中はうつゝありともみえなくに夢ともみえぬ夢も有けり  
なにばかりおとりまさりのあればかはうつゝを夢に思ひますらむ  
さめぬまはわかきにかへるをりも有り老は夢のみたのもしき哉  
同じ世にいかでと思ふ人もみつうれしきものは夢にぞ有ける

よみ人  
しらす  
御杖  
知紀  
御杖  
譽正  
由之

○諒闇

かむあが

- 神さります ○神あがります ○天原岩戸を開き ○天しす ○天しらしぬる君
- 久かたの天しらしぬる ○天の原 ○かりもがり ○あらしの宮 ○御はかつかふる
- かしこしや ○大宮人 ○かくります ○神かぐります ○天雲のいほへが下
- 雲がくります ○月日もしらず ○あやにかなしみ ○あやにかしこみ ○宮柱ふさしりまして
- いかさまにおもほしめせか ○みあらかを高知まして ○御言さばさず ○めしたまはず ○天の下ごこ世ゆく ○いはひもさほり
- 萬代さおもほしめして ○天地さもにをへんご ○いてまし所 ○けふの御幸 ○天皇のしきますくにご
- 天てる國の日の宮 ○ひのわかみや ○かくりのみや ○めすこもなし ○高日しらしぬ
- あやにかしこし ○大君のかたみのこゝを ○神さいませば ○久かれの天の河原 ○まうらがなしも
- 神ながら ○神さびせすこ ○天つ御門 ○すめるぎの神の御門の天つみ國 ○ゆゝしきかも
- かけまくも ○いはまくも ○天つ御門 ○天津宮 ○天つ國

○いはぐれます ○神宮によそひまつりて○御門の人も ○いはひふしつゝ ○いはひをるがみ  
大君は神にしませば天雲の五百重が下にかよりたまひぬ  
天地とよもにをへむとおもひつゝかへまつりし心たがひぬ  
わが朝廷千代とことばにさかえんと思ひて有しわれしかなしも  
高光るわが日のみこの萬代に國しらすまじ佐太の宮はも  
あすか川あすだにみむとおもへやもわが大君の御名わすれせぬ  
久かたの天しらしぬる君もゑに月日もしらす戀わたるかも  
泣澤のもりにみわすゑ祈れどもわが大君は高日しらしぬ  
草深き霞の谷にかけかくして日にくれしけふにやはあらぬ  
久かたの雲の上なる涙こそさみだれ初るはじめなりけれ  
はしめて御幸をつひのいてましとおもふにいといぬるゝ袖かな  
よろづ代とよばふはゝやの山松につねなき風をなどやどしけむ  
春秋のそのいでましの道かへていかなるけふのみもきなるらん  
くづれたるたかねの雪におどろきてまだ聲たてぬ谷の鶯

○哀傷 かなしみ

- ゆふべのけぶり ○夜ほのけぶり ○あだしのゝ露 ○消るしら雪 ○おくれ先だつ ○玉ゆらの露
- むなしき床 ○玉のを ○玉のをたゆる ○玉のをのきるゝ ○昔のした ○わかれのなみだ
- さらぬわかれ ○つひにゆく道 ○これの夢 ○雲がくれゆく ○光かくるゝ ○消はつる

東 人  
よみ人  
しらず  
同  
人 麻呂  
同  
檜隈女王  
康 秀  
景 樹  
直 養  
光澤上人  
有功 彌  
同

○終にのがれぬ道○山の霞 ○野への霞 ○かぎりの道 ○かぎりのかご ○わたり川  
○死出の山 ○野へにおくる ○草の原 ○まがり路 ○血のなみだ ○雨さふる涙  
○かへりくるかに○別をさむる ○つゆの命 ○あらざらん世 ○きのふけふさは  
鴨山の岩根しまける吾をかもしらにと妹が待つゝあらむ  
家にきてわがやをみれば玉床の外にむきけり妹がこまくら  
あすしらぬわが身とおもへどくれぬ間のけふは人こそかなしかりけれ  
時しもあれ秋やは人のわかるべきあるをみるだに戀しき物を  
つひにもく道とはかねてきゝしかどきのふけふとはおもはざりしを  
世の中にあらましかばとおもふ人なきが多くもなりにけるかな  
花とみし人はほどなく散にけりわが身も風をまつとしらなん  
あやめ草なみだの玉をぬきかへてをりならぬねを猶ぞかけつる  
立のぼるけぶりをだにと見るべきにかすみにまがふ春の明ぼの  
春立ときくにも物のかなしきはことしのこぞになればなりけり  
朝日さす山下露の消る間も見し程よりは久しかりけり  
ながめてもこの世の空とおもはぬはこにわかれたるあした也けり  
をしめどもかへらぬ道にゆきつれば死なぬ薬も今はなにせん  
ながらへてくやしきものはとほるべき人のあとゝふ手向也けり  
あふぎみしはゝその梢かきくれてさみだれそゝぐわが袂哉

人 麻呂  
同  
貫 之  
忠 岑  
業 平  
爲 頼  
匡 房  
辨 乳 母  
惟 方  
長 家  
赤 染 樹  
最 樹  
徹  
枝 直  
千 廣

○葬

消らむもさそふも露のしはらくを何秋風のさそひわくらん  
かたらひしきのふやうつゝけふや夢おもひさだのぬ世にも有哉  
はふり

景樹 千 蔭

古

後拾

續

代

○陵墓

うつせみはからをみつゝもなぐさめつ深草の山煙だにたて  
はれすこそかなしかりけれ鳥部山立かへりつるけさの霞は  
おもひきやむしのねしげき浅茅生に君を見捨てかへるべしとは  
いる月のおぼろの清水いかにしてつひに住べきかけをとむらん  
おくりおきてかへりし野への朝露を袖にうつすは涙なりけり  
あだしのゝ枯野のすゝきけふみれば君をまねきし袂也けり  
老て世にかひなきわれをおくらせてかへらぬ道を何いそぎけん  
はか

勝延 命婦 よみ人 順徳院 西行 東喜子

- けさの霞 ○けふのけふり ○ながめしかども ○露消はてし跡 ○かくす
- けふりもみえず ○後のわざ ○後のいさなみ ○なきがらをかさむる ○おくりきて
- 野への朝露 ○君をおきて ○心も空に
- みはか ○おくつき ○岩がくれ ○岩月たて ○かくれにけらし ○其代もしらぬ
- 千代のすみか ○岩むろ ○しろしの石 ○こげの下 ○岩月わる手力もがな ○君がたゞが
- 奥つき所 ○岩根のすみか ○昔しのぶの草 ○はかなく置し露 ○露消はてし跡 ○奥つきそここれ
- 昔のあま ○野べみれば ○昔むしにけり ○うき身のあま ○露をかたみ ○そこばかりなく
- はかなしや

万 同 同 同 新 後拾

大ともの遠つ神祖のおくつきはしるくしめたて人のしるべく  
われもみつ人にもつげむかつしかのまゝの手こながおくべき處  
豊國のかいみの山の岩戸たてかくりにけらしまでときなかね  
岩戸わる手力もがな手弱きをとめにしあればすべのしらなく  
たらちねははかなくてこそやみにしかこはいづくとして立とまるらん  
まれにくる夜はもかなしき松風をたえずやこげの下にきくらむ  
そこはかとおとひつゞけて来てみればことしのけふも袖はぬれけり  
岩むろにむなしくもゆるたきものゝもゝしきかにもそむ心かな  
くちはてぬしるしの石もとしへなば昔の下にやさらに埋れん  
わかぬ浦の波路の夕日せにおひて御陵とふさへかしこかりけり  
かくりますとこつ御門に人たえていく世へにけむいでましの山  
五百枝さす檜の尾上の高松のみかげによれる天の下かな

家持 赤人 手持女王 同 頼成 後 慈圓 宣門 經雄 廣滋 千廣 直養

○靈祭 追福

たまゝつり

- たき人 ○なき玉 ○一めぐり ○三めぐり ○七めぐり ○めぐりきて
  - けふはその日 ○十年あまり ○そのころさ ○その世のかけ ○むかしへ ○そのかみ
  - おくるゝ身 ○いますか如く ○かたみ ○しのぶ ○はゝその棺 ○はゝのみのちゝ
  - 袖の露 ○ひるまなき ○名のみきゝつゝ ○おもひいづる ○うつゝの夢
- 也ふたゝみ手にとりもちてかくだにもわれは戀のむ君にあはぬかも 坂上耶女

みかげのみしたひく／＼有明のつれなく世にもものこりけるかな  
 身をつくすかひはなけれし目にみえぬみたまのためは分てつかへむ  
 昔の下によろこぶ君が面かげを此世ながらに見るよしもかな  
 その頃とおもひいづるを也かりにて董さく野もながめられつゝ  
 あはれわが袖さへほさぬ露のまにわかれし頃もめぐりきにけり  
 ちりつもる落葉をみてもはゞそ原その木がらしの昔をぞ思ふ  
 いにしへにめぐりあふひの朝露をこけの下にもおもほすや君

景樹 重之 謙 秀雄 義豊 寛光 有功卿

○無常 つねなき世

- 常なき身 ○はかなき世 ○はかなき身 ○夢の世 ○あるかなきかの世
- なにか常なる ○ゆく水のかへらぬ ○長き世の夢 ○あすしらぬ ○露の身
- かへらぬ水の沫 ○稻妻 ○かりそめの世 ○あるかなきかの世 ○なにか常なる
- 日かげまつゆ ○かりのやどり ○定めなき世 ○おくれ先だつ ○人の世の中
- あはればかなき ○あさなき雲 ○あともなく ○うつせみの世 ○目の前にかはる
- つひのすみか ○さらぬわかれ ○ふるき枕 ○ふるき衾 ○いづれかうつゝ
- 頼まれぬ世

万同古拾

世中はむなしきものとしる時しいよ／＼ます／＼かなしかりけり  
 ことゝはぬ木すら春咲き秋つけばもみぢちらくは常をなみこそ  
 世中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞけふはせになる  
 朝がほを何はかなしとおもひけん人をも花はさこそみるらめ

大伴卿 家持 よみ人 道信

新

くるゝまもまつべき世かはあだし野の末葉の露に嵐立なり  
 行めぐるうき世の雲のむらしぐれつひにはぬれぬ人なかりけり  
 露霜はおきかはりてもあるものを人の世ばかりはかなきはなし  
 さけばちりみつればかゝる春秋の花と月とぞ人の世の中  
 花紅葉さそふ色かををしむ間に身の春秋もつひの夕風

式子内親王 景樹 由之 成章 眞淵

○釋教 ほとけのみち

- みほごけ ○わしの山 ○わしの高根 ○鹿の園生 ○つるのはやし ○雲の山人
- 月のみかほ ○法の蓮 ○法の舟 ○法の灯 ○法の水 ○法の花
- のりの浮木 ○法のちかひ ○むねの蓮 ○衣のうらの玉 ○蓮のうてな ○彼さし
- ちかひの海 ○ささり ○ささりいる ○ささりの光 ○菜つみ水くみ ○むなしさまける
- 虫もへだてぬ ○花ふる ○うるふ草木 ○法の雨 ○くるしき海 ○たからの池
- 心の蓮 ○薪つけ ○こゝろの水 ○三の車 ○おもひの家を出る ○誓の舟
- みだの御國 ○極樂 ○こゝろのしな ○法の門 ○西のそら ○紫の雲
- あかの水 ○あか井 ○法の師 ○墨染の袖 ○墨染の衣 ○墨の衣
- 法の場 ○法の道芝 ○雲のむかへ ○二の海 ○法のまこと ○妙なる法
- 花奉る ○手向る花 ○十のさかひ ○五のさばり ○むつちまた ○そのあかつき
- 曉なまつ ○三のこゝろ ○十たびの御名 ○法のちから ○法の舟人 ○心の月
- 空の月 ○むねの月 ○寺 ○ふる寺 ○みてら ○かれ
- かれの音 ○世をすくふ ○大寺 ○あさむかす ○空より花の ○世をいさふ



生死の二の海をいとはしみしほひの山をしぬびつるかも  
 世の中のしきかりいほにすみくいてたらん國のたづきしらすも  
 布施おきてわれはこひのむ欺すたゞにはゆきて天路しらしめ  
 朝毎に御法の庭にふる雪は空より花のちるかどぞみる  
 わしの山むかしの春は遠けれどみのりの花は猶にはひけり  
 しばしこそ人の心に濁るとも春まではつべき法の水かは  
 明らけき法のともしびなかりせば心のやみのいかではれまし  
 雲をおこし浪を立てはみすれどもとより風の姿やはある  
 ちる花に世の常なさをさとする身ややがてよし野の奥も尋ねん  
 ためにとてのこす薬のなかりせば世のいたづきをいかでのぞかむ  
 大空の風のかたちをみるめには土もむなしきものにざりける  
 後の世を願へる人の心こそ法のはちすのつばみ也けれ  
 ともしびを人のためにもかゞぐれば心のやみものこらざりけり  
 ながれきてあづまに深きのりの水この行末やいづちならん

よみ人  
しらす  
同  
同  
清重  
時廣  
内大臣  
公雄  
芦庵  
涌蓮  
日善  
大綱  
契沖  
真淵

○社 社頭 やしろ

- 天つ神 ○國津神 ○八百萬の神 ○八十萬の神 ○八百萬千萬神 ○神のみむる
- 神のみあらが ○神がき ○いがき ○神のいがき ○神の宮人 ○神まつる
- 神の宮ぬ ○神のみあらが ○氏神 ○神がより ○すめ神たち ○大神

- 大御神 ○神のみここ ○神のみしわざ ○神のみかさ ○天つ社 ○國つ社
- 四方の社 ○千々の社 ○天つ社國つ社 ○天つ神國つ神 ○神社 ○川社
- みず垣 ○玉垣 ○みづの玉がき ○八重垣 ○板垣 ○眞垣
- 神の木根 ○神垣の松 ○神垣の杉 ○神のみたま ○みたまのふゆ ○みしめひく
- みしめなほ ○いはひ杉 ○いはひ楓 ○みむろの鏡 ○御前の鏡 ○御戸 ○いはふ
- 廣前 ○大御前 ○うつ御前 ○ますみの鏡 ○御戸 ○宮柱
- 榊葉 ○榊葉のかげ ○ゆふしで ○ゆふだすき ○白ゆふ ○宮柱
- ふとしきたて ○千木 ○氷木 ○かたそぎ ○かつか木 ○さもす火
- 庭火 ○八をさめ ○すがこも ○いづの眞や ○いはひ清む ○いはひ清む
- 神の心をさる ○ひもろき ○いはざる ○八ひら手 ○神のはふり ○神の御け
- 神のみき ○神の大御酒 ○なほらひ ○れぎ ○はふり ○氏人
- 氏子 ○うぶすな ○ゆふだすき ○玉だすき ○神代 ○神代おほゆる
- すがむしろ ○みわすままつる ○みてぐら ○豊みてぐら ○大幣 ○ぬさ
- 神やつこ ○はふりこ ○いぐしたて ○ぬさ手向て ○神みそ ○神のみけし
- 神のみそ ○かぐら ○神あそび ○わざなき ○かくり身 ○かくり世
- 神のみけ ○かぐら ○神あそび ○わざなき ○かくり身 ○かくり世

古 大原やをしほの山もけふこそは神代のこともおもひいづらめ  
 同 神垣のみむろの山の榊葉は神のみまへにしげり合にけり  
 拾 四方山の人のたからとする弓を神のみまへにけふたてまつる  
 後 千早振神の園なる姫小松よつづ代ふべきはじめ也けり

千早ぶるかしの宮のあや杉は神のみそぎにたてるなりけり  
岩にむす苔ふみならずみ熊野の山のかひあるもく末も哉  
天つ神國つ社をいはひてぞわがあし原の國はをさまる  
ひだちなる鹿島の宮の宮柱なほ萬代も君がためとか  
日のくまのもりの榊葉音信ぬふきやかよへるいせの神風  
としへぬる宮居の杉はそれをさへふしをがむべく神さびにけり  
大御神もとめ來まして御心をなくさの濱の宮るたふとし  
あまつ神國つ社はあまたあれども君を千年と守らぬはなし  
たてそむるはひろの殿や八百萬神のやしろのはじめ成らん  
神がきにたてる榊の末かけて君をときはにいのりつるかな  
たがためとたれかおもはむ世を守る天つ社も國つやしろも  
神さびて心もすめるみたらしにうつる杉間のありあけの月

○伊勢 いせ

- 神の御門 ○神の大御門 ○内外の宮 ○ふた宮 ○ふた大御神
- 神風の伊勢 ○神路山 ○千木高しりて ○宮柱ふとしき立 ○高がやふく ○御船代
- 御樋代 ○心の御柱 ○相殿の神 ○枝宮枝社 ○大玉串 ○豊みてぐら
- 下つ岩根 ○いつきの宮 ○神風のいつきの宮 ○宮川 ○豊みてぐら
- 内宮 ○大御神のみや ○天てらす大御神 ○天照す大神 ○天てる神 ○日の大御神

よみ人  
しらざ  
太上天皇  
後宇多院  
顯雅  
菅彦  
尊孫  
大平  
弘訓  
鹽呂  
春正  
直枝

○日の神 ○天照す日の神 ○すめ大御神 ○すめら大御神 ○うちつみや ○いざゝのみや  
○拆鈴五十鈴の宮 ○拆劍五十鈴の宮 ○五十鈴河原 ○御裳すそ川 ○御戸明の神 ○山田の原  
○外宮 ○豊受の大御神 ○豊うけの大神 ○豊うけの神 ○御けつ神 ○豊みや川 ○豊うけのみや  
○ごつみや ○わらこひの宮 ○百傳ふわたらひの宮 ○豊みや川 ○豊うけのみや  
新 宮柱下つ岩根にしきたてゝ露もくもらぬ日のみかげかな  
同 神風やいすゞの川の宮柱いく千代すめと立はじめけむ  
同 神風やいすゞの川のいそのみやとこ世の浪の音ぞのどけき  
代 君が代は天てる神の宮づくり八百萬たびあらたまるまで  
同 とこしへに世をてらしみす日のみたまつけし鏡はいせの大神  
神路山みねの榊のいろにこそみもすそ川の底はすみけれ  
豊受の神のめぐみの露なくば世の人みなや枯はてなまし  
五十鈴川高がやふけるみあらかに神代のでぶりいちじるき哉

○出雲 いづも

- 天の日隅の宮 ○ひすみの宮 ○いづもの宮 ○杵築の宮 ○杵築の大宮 ○八百丹杵築
- 八百米杵築 ○天下つくりらし神 ○國うしほける神 ○神事しらす ○かくりごしらす ○大國主の神
- 大己貴の神 ○うつし國玉神 ○八千矛の神 ○あし原しこの神 ○國作大己貴の神 ○うつし國玉神

八雲立出雲の神をいかにおもふ大國主と人はしらすやも  
天下つくり給ひし大神につかへまつるもおほげなの身や

西行  
俊成  
師繼  
時信  
宣長  
尊孫  
英棟  
千蔭

八雲たついづものこらがふとだすき萬代かけて宮路かよはん  
御功のおほくに主の宮所うへこそたかくたふとかりけれ

○岩清水 いはしみづ

○廣幡の神 ○廣はたの八幡の神  
○神の心をくむ ○清き

○八幡山 ○をさこ山 ○はさのみれ

重老 爲胤

後拾

こゝにしもわきて出けん岩清水神の心をくみもしらばや  
をそこ山みねの櫻にもろ人のかざしの花をたぐへてぞみる

増基 兼昌

堀

岩しみづかざしの花の打なびき君にぞ神の心よせける

よみ人 通氏

同代

男山櫻かざして立まひしおぼろ月夜のかげぞわすれぬ

支順 高臣

久かたの月のかつらの男山さかめくかげをあふぐ御代かな

高臣 高臣

男山さかめく御代の聲す也千代をしらぶる峯の松風

高臣 高臣

石清水うつろふ月の入がたに物の音すめりみもきならしも

高臣 高臣

あたむけん弓矢手にぎるますら雄のいつきまつろふ御いつしるしも

高臣 高臣

○賀茂 かも

○下がも ○上がも ○御祖の神 ○別雷の神 ○河合  
○賀茂の川風 ○千早振その神山 ○賀茂の川風 ○賀茂のみあれ ○神のみあれ  
○たすのもり ○かた岡 ○神山 ○そのかみ山 ○天の岩ふね  
○みたらし川

千早ぶる鴨山  
たすの神  
あふひかづら

桐呂 高臣

後勅代

かくてのみやむべきものか千早振賀茂の社の萬代をみむ  
神山の神もまつもしげりつゝときはのいろぞ久しき

三條右

かくしてぞかもの社のもふかづら上をさまれば下もみたれや

重政

神垣のみたらし川の白波のさやれにかよる音のさやけさ

景樹

今もなほ山あるの袖吹かへし神代にかへす加茂の川風

千蔭

神代より神さびにけん大空を別雷のみづのみあらか

直兄

○春日 すがか

○春日山 ○はるびの春日 ○春日野 ○三笠山 ○三笠山さして  
○松にさく藤 ○藤のうら葉 ○藤のしなび ○藤のかさし ○藤浪 ○武みかづちの神  
○経津主の神 ○天の兒屋根の神 ○ひめ神 ○天の下

鏡永

後拾

けふまつる三笠の山の神ませば天の下には君ぞさかゑん

實光

新金

三笠山神のしるしのいちじるくしか有けりと聞ぞうれしき

太政大臣

けふまつる神の心やなびくらんしでに浪たつ佐保の川風

英升

ふる雨に杉のしつこも落そひて神さびまさる三笠やまかな

契冲

○住吉 すみのえ すみよし

○眞すみのえ ○すみのえの神 ○橋の小門の沙瀬に顯る ○四のやしる  
○下くだるあら人神 ○底つゝのなの命 ○中つゝのなの命 ○上つゝのなの命  
○千木の行合 ○息長たらし姫の命

詞 四まへの大神 ○きしの姫松 ○みづ垣のまつ ○松  
 住吉のあら人神の久しさにまつも幾度生かはるらん  
 住吉の浪にひたれる松よりも神のしるしぞあらはれにける  
 神代より津守の浦に宮ゐしてへぬらんとしのかぎりしらすも  
 西の海やはぎが原の浪間よりあらはれ出し住吉の神  
 住吉のきしの松原きてみればむかしの浪のおもかげぞたつ

○日光 ふたらのみや

○ふたら山 ○あづまてる神 ○あづまてらす神 ○世をしづめます  
 ○御いつかしこき ○御かけ ○御めぐみ ○ふたつなき功 ○大君の遠のまもり神  
 ○天の下申たまふ ○御末の策 ○ものゝふの八十伴の雄 ○しげき御かけ  
 ○世をまもりませす ○天の下しづめ給ひし ○天下治たまひし ○伴男あざもひまして

安御世と君の大御代を東照神の命ぞさだめましける

世におほふ真袖といはむ春霞ふたらの山に立そめにけり  
 玉くしげふたらの山の宮柱たてし御法は世々にみちめや  
 ふたら山ふたゝび御代の動なきためしにたてし神のみやしる  
 下野や神のしづめしふたら山ふたゝびとだに御代はうごかじ

○注連 しめ

○こゝろのしめ ○しめなほ ○千尋のみしめ ○いばふみしめ ○みしめ ○みしめなほ

經 信  
 資 業  
 隆 子  
 兼 直  
 知 紀

宣 長  
 枝 直  
 永 章  
 利 和  
 眞 淵

万 ○ひくしめ ○しめゆふ ○しめはへて ○八重のしめ繩 ○日の御綱 ○しりくめなほ  
 ○ひく ○さす ○むすぶ ○ゆふ ○かくる ○はふりらがいはふ社のもみち葉もしめなほこえてちるとふものを  
 みづがきにかくるしめなほ打はへて世はのどかなる神風ぞふく  
 山本の苔むす岩にしめ引ていますばかりぞ神さびにける  
 此もりは神ましげりなく深くしげれる松にしめはへて見ゆ  
 春 門  
 契 沖  
 蘆 庵

○木綿 もふ しで

○白髪つくゆふ ○しらゆふ ○涙の白ゆふ ○ゆふしで ○八重のゆふしで  
 ○神のゆふしで ○御月のゆふして ○眞そゆふ ○みしまゆふ ○ゆふかづら ○ゆふだすき  
 ○白ゆふ ○花のゆふしで ○みつかゆふ ○白にきて ○青にきて ○なびく  
 ○かくる ○櫛葉にかくる ○そよぐ

万 ○ふかけてまつるみむろの神さびていむにはあらず人目多みこそ  
 霜八度おけどみどりの櫛葉にもふしでかけて世を祈るかな  
 もふだすきむすぼれつゝ歎く事たえなば神のとくと思はん  
 みそぎせし神の昔ぞおもほゆるあはぎが原の浪のしらゆふ  
 よみ人  
 しらす  
 忠 成  
 道 綱 母  
 道 男

○幣 みてぐら ぬさ

○みてぐらしる ○豊みてぐら ○大ぬさ ○麻ぬさ ○麻の大ぬさ ○ぬさの追風  
 ○ぬさとりむけて ○ぬさたてまつる ○ぬさにきる衣 ○ぬさとりて ○ぬさむけて ○みぬさ

○手向るぬさ ○大ぬさのひくて○ぬさしろ ○ぬさ袋 ○切ぬさちらす ○染ぬさ  
新 神風や豊みてぐらになひくしでかけてあふぐといふもかしこし 太上天皇

みとしいはふ廣瀬立田のみぬさには神のこゝろも打なびくらし 依平  
君が代を安みてぐらとさよけもて神のみや人神まつるらし 亮澄

○神祇 かみ

- あめの神 ○國の神 ○天つ神もろく ○くにつ神もろく ○天地の大御神たち
- 天つ神 ○國つ神 ○天つみ神 ○國つみ神 ○天つ社 ○國つ社
- 天つ御祖神 ○天つ神ろぎ ○神ろぎ神ろみ ○遠すめろぎの神 ○皇神等 ○皇神
- 遠つ神 ○靈ちばふ神 ○千早振神 ○八百萬の神 ○千萬神 ○八百萬千萬神
- もゝ千萬の神 ○神ろぎ ○神ろみ ○神なばら ○神さび ○神わざ
- 神のみしわざ ○神事 ○神風 ○神のいぶき ○神の心 ○神の御心
- 神がより ○神はらひ ○神やらひ ○神あそび ○神わざ ○神さます
- 神にします ○神にいませば ○神ならぬ身は ○神ぞしるらん ○神の御心 ○神の御末
- 神のむすび ○神のちはひ ○神の幸ひ ○神にこひのむ ○神にいづく ○神つまり
- 神づまります ○神の光 ○神の御いつ ○神のくしび ○神のみたま ○神のみたまの冬
- 神まつり ○神のみまつり ○神のしづめ ○神のしづむる國 ○神のこゝろ ○神のみうら
- 神のつく ○神のみまへ ○神の御手代 ○神代 ○神の御代 ○神の大御代
- 天の御中主の神 ○高みむすびの神 ○神むすびの神 ○むすふの神 ○あしかひ彦ちの神
- 天の常立の神 ○國の常立の神 ○伊邪那岐神 ○伊邪那美神 ○二柱みおやの神 ○男女三柱の神
- 天てらすひるめのかみ ○すさのなの神 ○大名持の神 ○少彦名の神 ○少名御神

万 おもはぬをおもふといはじ眞鳥住うなでのもりの神ししらすん しみん  
同 天地のとも久しくいひつけど此くしみたましかしけらしも 同  
同 大名持すくな彦名のいましけんしづの岩屋はいく代へぬらん 同  
同 わがせこしかくしきさば天地の神をこひのみながくとぞおもふ 同  
古 神垣のみむろの山の榊葉は神のみまへにしげり合にけり 生石村主  
拾 みづがきの久しかるべき君が代を天照神や空にしるらむ 清廣呂  
新 八百萬そこのらの神のとしなみによるひるまるきみが御代哉 爲し人  
代 いさぎよき下つ岩根の朝日影みがけるものは玉ぐしの露 爲し人  
同 秋つしま神の治る國なれば君しづかにて民もやすけし 爲し人  
同 あしかびの浪のきざしも遠からず天つ日つぎのはじめとおもへば 爲し人  
同 君が代に祈る心をまかせたるいはひぬしとは神の御名なり 爲し人  
同 目に見えぬ神の心の神事はかしこきものぞおほにな思ひそ 爲し人  
同 世の中のよきもあしきもことごとくに神の心のしわざにぞある 爲し人  
同 天地の神のめぐみしなかりせば一日一夜もありえてましや 爲し人  
同 千早ふる神代おぼえてあかつきの長鳴鳥にあくる御戸哉 爲し人  
大 八千またにみまのみことを立まちて道びかしける神ぞ恐こき 爲し人

いざなぎの神もわかれやかたす國根の國まではしたひもきけん  
 わたつみの豊はた雲ぞなびくなる有馬の村に神まつるらし  
 神は猶神代ながらの天の戸をおしひらきてやみそなはすなん  
 君が代を一年ごとに持分て八百萬てふ神ぞまもらむ  
 榊葉にいはひてかけししらもふのなびくや神の心なるらむ

春里 廣滋 景樹 隆正 有功卿

○祝 慶賀 いはひ よろこび

- 千代 ○萬代 ○八千代 ○八千年 ○いく千代
- いく世 ○いくかへり ○千年へん ○千年ふる ○いく千年
- ながき世 ○とよさし ○かぎりなき ○はてしなき ○たえせト
- つきせト ○とこさば ○さきは ○かきは ○百千度
- さかゆる ○さかえむ ○千代の色 ○千年のためし ○千々の秋
- 千代のかけ ○千世の数 ○千の春 ○濱の眞砂 ○道ある御代
- ゆたげし ○ゆたかなる ○のどげし ○のどかなる ○たぬしき
- うれしき ○君が代 ○君かみげ ○君がめぐみ ○君が大御代
- 御代がらか ○なままる御世 ○かばらぬ ○さまれ石 ○松
- 竹 ○まつ竹 ○友鶴 ○すむ鶴 ○松
- あそぶ龜 ○玉椿 ○八千代の椿 ○蓬が島 ○松の花さく
- 十かへりの花咲松 ○雲のまつ ○うら安の國 ○玉がきのうちづくに ○日の本
- うごきなき ○古もまれなる ○正木のつづら ○ゆたかなる世 ○ゆたのたゆたに
- のどかなる ○波風きいぬ ○世のありかず ○よほひ久しき ○なままれる世

万 古 同 同 拾 金 新 勅 續

- 菊の下水 ○民安く ○しき波の雨 ○國ゆたかなる ○ふる雨時をたがへぬ
  - 風をさまれる ○御代の例 ○明らけき世 ○くもりなき世 ○きはみなく有べき
  - 月日の限なき ○國さかえんこ ○つきせす ○位山のぼる ○たもさゆたかに
  - いまいくたびか ○かくしつゝ ○猶こそあかれ ○いはふ ○いはゆるれ
  - 松ぼものかは ○天地さゝもに ○月日さゝもに ○天地さいや遠長く ○ばかりもしらぬ
  - みれの松風 ○なままる風 ○霜雪の白髪までに ○萬世に國しらすんこ ○千代さもさらト
  - くもらぬ空の光 ○空ばれて ○天原めぐる月日 ○さく花のかなるが如く ○のどかなれさは
  - 豊坂のぼる ○朝日子の八重さす ○朝日ものごに ○みれに朝日の ○のどかなれさは
- 敷しまの倭の國は言靈のたすくる國ぞ眞幸くあれよく  
 うれしさを何につまむから衣袂もたかにたてといはましを  
 つくばねのこのもかのもにかげはあれど君がみかげにますかかげはなし  
 君が代にあふ坂山のいはし水木がくれたりとおもひけるかな  
 萬代も猶こそあかね君がためおもふ心のかぎりなければ  
 おのづからわが身さへこそいはゆるれ君が千代にもあはまほしさに  
 君が代は千世ともさゝじ天の戸や出る月日のかぎりなければ  
 天の下めぐむ草木のめもはるにかぎりもしらぬ御代末く  
 うれしさを昔は袖につみみけりこよひは身にもあまりぬるかな  
 としごとにいのりしくればおもなれてめづらしげなき千代と社思へ  
 よはひをやゆついは村ももづるらん世に動きなき君が御代かな

よみ人 景樹  
 元輔 樹  
 式子内親王 俊成  
 國行 公忠 忠峯  
 同 同

天下事ぞともなくみてぶりのふるきにかへる御代にも有かな  
千萬に物たりみちて明らけき此大御世にあるがたのしさ  
倭なるかるの社にありときくいはひつきせぬ君が御代かな  
海中もつひにたがへず新ばりの御代は今こそ盛なりけれ  
むさしの草葉もろむき天下なびかふ御代にあひにけるかも  
大國に生るゝだにもうれしきにかくたぐひなき御代に逢けり  
始ありて終のなきは天地とわが大君の御代となりけり  
君が代に神の惠の露そひて御謝山もとの海ぞたえせぬ

○産屋 うぶや

○ゆく末

○松も子もたり

○生そふ松

○千年のふつ日

○二葉の松

○ゆく末はかれて遙に○つるのひな

○二葉より

○おひさきこもれる

○すたちはとむる

○二葉の小松

○濱の眞砂

○いとさなき衣の袖

○おひさき

○家の風けふ吹初る

○ひめ子まつ

○萬代をかぞへむ

○たのもしき哉

○ちこそのはつ日

○千代もさなづる

拾 同 同 後拾

松がえにかよへるえだをとぐらにてすだてらるべきつるのひな哉  
萬代をかぞへむものは木の國に千ひろの濱の眞砂也けり  
われのみや子もたるてへば高砂の尾上にたてるつるも子もたり  
おもひやれまだ鶴の子のおひさきを千代ともなづる袖のせばさを

元 輔  
同  
よみ人  
しらざ  
藤三位

俊重 尊朝 千隆 春門 猛彦 眞瀧

金 月

はがくれにつはるとみえしほどもなく子はうみ梅になりける哉  
千代ふべき春の日かげは神山のみねよりいづるめぐみ也けり  
わが世さへいかでとぞおもふひなづるのへなん千年の末もみるべく  
くはゝれる春のむ月のつるの子は千世のおひさきいちじるき哉  
わかみどりさすがに千代のおひさきもこもる二葉のまつの色哉  
おろかさの親に似よとは思はねどをしへおかるゝ子のゆくへかな

○七夜 なぬか

○けふはなぬか

○千代のなゝ夜は

○松は七日になる

○生そめてまだ七日なる

○なぬかばかりに

○たゞなぬかこそ

よみ人  
しらず  
大 秀  
千 隆  
定 信  
枝 直

拾 同 後拾

ことし生の松は七日になりけりのこりのほどを思ひこそやれ  
君がへむ八百萬代をかぞふればかつぐけふぞなぬかなりける  
いとさなき衣の袖はせばくともこぶのいしをばなでつくしてむ  
おほち父その母としのいはふ子をあからめなせそうぶすなの神

○袴着 裳着

○玉もを結びあげて

○玉裳のよそひ

○けふはなぬか

○おひさき

○こひのはかまぎ

○けふはなぬか

○こひのはかまぎ

○沖つ玉藻

○赤ものよそひ

兼盛  
能宣  
公任  
春哉

拾 後拾

岩の上の松にたとへむくれ竹の世にまれなる種ぞとおもへば  
住吉の浦の玉藻をむすびあげて渚のまつのかげをこそみの

左大丞  
元輔

元服

うひかうぶり

今よりは男さびして竹の馬はとの車にこゝろひかるな  
よろこびを千代にかさぬるはじめとてけふとりよそふうひの袴着  
けふよりは君にひかれて春の日の赤ものすその長くこそへめ

古大濱  
道平臣

後拾同調

年賀

よはひをいはふ

大原やをしほの山の小松原はやこまかれ千代のかけみむ  
もひそむる初もともひの小むらさき衣のいろにうつれとぞおもふ  
久かたの月のかつらもをるばかり家の風をもふかせてしがな  
こむらさきたなびく雲をしるべにて位の山のみねをたづねん  
春の日の萬代ながきためしをば初もともひのけふよりぞしる  
老の波けふよりかねて万代もよすへくみゆるいそびたひかな  
けふさらに立のびてこそみえにけれ千代をしめたる園の若竹

古元菅能貫  
功道家宣之  
卿樹輔母

- 君がよはひ ○つるのよはひ ○かめのよはひ ○わがよはひ ○松のよはひ ○へねらん君が
- つきとぞ思ふ ○長濱の眞砂 ○八百日ゆく濱の眞砂 ○竹のよはひ ○長きよはひ
- ちぎるよはひ ○よはひ久しく ○よはひ長けく ○かぞふれば ○つきせぬ世々 ○かりきなき
- きはみなみ ○はてもなく ○さしなつむ ○君が八千代 ○さる杖 ○はさの杖
- 竹の杖

古同後拾

四十賀

よそぢの賀

千早ぶる神のきりけんつくからに千年の坂もこえぬべらなり  
わがよはひ君が八千代にとりそへてとやめ置てば思ひ出にせよ  
百年をいはふをわれはきゝながらおもふがためはあかずぞ有ける  
たが年のかすとかはみむもきかへり千鳥なくなる濱の眞砂を  
植なべて友と契れる庭の松うからやからの千代もともなへ  
君が代を一年ことにもち分て八百萬てふ神ぞまもらん  
あしたづの翅やすむる松がえのかさなる千代をたれかみざらん  
君がへむ千世のたよりを今年よりくもるはるかに待わたるかな  
君が代にこもれる千世はあるものを松のみとしもおもひける哉  
朝な／＼むかふたらひのみづ鏡かはらぬかげにますものぞなき

運昭  
しみん  
同貫之  
英好  
隆正  
智信  
三冬  
眞淵  
有功卿

古同六

○くれ竹のよそぢ ○よそせせを ○よそぢへにけり ○さゝ竹のよそぢ ○老のぼしめ  
○老の山口 ○老そむる ○老らくのこんさいふなる ○老のさかゆく  
櫻ばなちりかひくもれ老らくのこむといふなる道まがふがに  
萬世をまつにぞ君をいはひつる千年のかけに住んとおもへば  
萬世をけふよそとせとかぞふればのこりはるけき君の御代かな  
老らくのこむてふ春は道かへて花のしをりをたどらざらん  
末つひに千代も八千代もならびえよことしを老の難波津にして

業平  
兼盛  
廣海  
安臥



○五十賀 いそぢの賀

拾古

○梓弓いそぢ ○もよたらしいそぢ ○いそさせ ○いそ山まつ ○いその岩がれ  
 ○いそしく ○百年のなかは

いたづらに過る月日は多けれど花見てくらす春ぞ少き  
 千年へむ君しいまさはすべらぎの天の下こそうしろ安けれ  
 千世ふべき濱松が根によせかへるいそのしら波かすぞしられぬ  
 花鳥も君がたのしむもよ年のなかばの春にあひにけるかな  
 もよ年のなかば過ぬと藤かづら千代をまつにやかより初らむ  
 君が代ぞはるけかりける三千年になるてふものよなかばと思へば

千 元 興  
 長 景 千  
 千 景 千 元 興  
 千 長 景 千 元 興  
 千 景 千 元 興

○六十賀 むそぢの賀

同月古

○むそさせ ○むそぢの老 ○わかきにかへる ○老わすらるゝ ○そのかみにかへる  
 ○むかしにかへる ○みどりこの昔 ○わかえつゝ

つるかめも千年の後はしらなくにあかぬ心にかかせはてゝむ  
 もろ人のよろこび來ます六十をばはこやのみよのなかばとぞきく  
 六十をば何よろこびとおもふらん千世かさぬべき君とこそみれ  
 みどりこのむかしの春に立かへりいく春秋もきつゝならさん  
 ふすま田の小田の若なへわかえつゝ在へむ千世の敷にとらばや  
 もよづたふ六十を千世のはじめとは君へて後ぞしるべかりける

季 方 源 實 靜 滋  
 廣 耶 子 雲 賢 香

○七十賀 なよそぢの賀

月新古

○なよそぢにみつ ○いにしへも稀なる ○むかしも稀なる ○むかしへにまれなる○まれなるよはひ  
 ○まれなる世にも

かくしつゝとにもかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな  
 なよそぢにみつ濱松老ぬれど千代のよこりはなほぞはるけき  
 七十にみちぬるしほをまちつけて千年つむべき舟よそひせり  
 たもみなく七十までもつかふるをまれなりけりと神もうくらん  
 十づゝをまだ七わたの玉の緒にちいのよはひもぬきやとむらむ  
 露ばかりうき事きかでいにしへもまれなりとさくよをへぬる哉

千 尙 景 顯 清 仁  
 隆 忠 樹 昭 輔 和御製

○八十賀 やそぢの賀

月勅

○梓弓やそ ○妻こもるやそ ○八十の春 ○八十もゆたに ○八十も安くこゆ○八千代もへなん

かぞふれば八十の春になりにけりしめの内なる花をかざして  
 君ぞみむ八十の春を過し來て猶もながらの山のさくらを  
 千代までといのる心に八十へし君を老ともおもはざりけり  
 きの川や八十瀬のさいれ千代をへていはほとならば君ぞなづべき  
 いつとなく千年の坂もこえぬべし八千代のちまたを怠らすゆけ  
 百傳ふ八十島山のまつかせもけふより千代のこゑよばふらん

千 重 千 高 經 成  
 隆 老 廣 豐 正 仲

○九十賀 こゝのそぢの賀

○百年のちかづく ○百年も程遠からぬ ○もゝ年もちかくなる ○もゝ年ちかきよはひ

續 八千代までちぎれる杖はもゝ年に近づく君がよはひとぞおももゝ年のちかづく坂につきそめて今もく末もかくれとぞおもふ

經 有 景 樹

○新婚 とつぐ

○相生の松 ○むすぶ契 ○いもせの中 ○相うるはしみ ○うるはしみせよ ○いもせせ

朝もよし木の川のべにむつまじくさかえてたてるいもとせの山  
老松もうれしとやみむまちてくねぐらさだめし千代の友鶴  
むつまじきちぎりをはしにならひつゝ齡はたづの千代にあえなん  
萬代にかゝれとてこそ久かたの天の御はしらめぐりそめけん

雄 子 濱 正 之 土 滿

○新室 にひむろ

○新むろ ○つくれる家 ○萬代までに ○さばに住べき ○住そむろ ○住べきやせ

はたすゝき尾花さかぶき黒木もてつくれる家は萬代までに  
ひだゝくみうつ墨繩のながらへて八千代いませとつくる新室

元正天皇 枝直

新むろの朝けのけぶり立そめつむかひの松の千代にくらべん  
まどの内にまづさしいれてうれしきは千代のはじめの月日也けり

千 坐 有 功 卿

和歌うひまなび奥附  
定價 貳圓五拾錢

昭和六年五月一日印  
昭和六年五月五日發行  
昭和九年十月卅日六版發行

著者 鈴木重胤

大阪市南區横堀七丁目一九番地  
版權所有 發行者 前田寬治

印刷者 岩岡忠一



發賣所

大阪市浪速區元町二丁目

宏元社書店

振替大阪五七七二番  
電話戎五四六二番



終